

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

特集：生活文化・衣（ファッション）の発信



9
2001

特集

生活文化・衣の発信

目次

ものづくり都市の再生が日本を救う 藤原肇(株式会社マーケティング企画代表取締役)	4
ファッション甲子園で高校生デザイナー発掘 青森県・白取功	8
ぬくもりを織る、障害者の生きがい、自立目指し 山形県三川町・飯野美世枝	10
ファッションウィークで織都アビール 群馬県桐生市・石原雄二	12
台東区の地場産業が統一ブランド 東京都台東区・横田浩次	14
県内若手デザイナーが織姫ファッションショー 福井県今立町・佐々木哲夫	16
世界の工房「GIFU」へデザイン力強化 岐阜県・棚橋幸治	18
浜ちりめん復活へ和装イベント 滋賀県長浜市・服部泰治	20
石見銀山の風土に根ざすモノづくり 島根県大田市・松場登美	28
高齢者が支える伝統の紬織 沖縄県仲里村・平良博一	30
リストラと地域活性化 藤原作弥(日本銀行副総裁)	3
街道を歩く 長澤純一(福岡県副知事)	22
文化発信二つの例 伊藤白潮(俳人)	27
地域IT施策の推進 総務省自治行政局地域情報政策室	32
PFI、官民共同で責任を 坂梨義彦(電源開発(株)新事業戦略室長)	36
・ファッション	
ツチノコ発見!! の報に一カ月に4千人 兵庫県美方町・宮脇寿一	35
焼きそばでまちがブレイク 静岡県富士宮市・渡辺孝秀	44
誇りをもてる古里へ「やっちゃんかい」 宮崎県日南市・河野健一	45
八女市で初のイベント「出前研修会」	38
・地域文化・伝統	
倉吉ニホンリスの会 鳥取県倉吉市	40
・地域を支える女性パワー	
野の花サーブス 神奈川県秦野市	42
・生活文化・衣の発信	
センター通信	46
生活文化・衣の発信	47
都道府県漫遊／手前みそです	48

表紙●宇和島まつり

宇和島まつり最終日の七月二十四日、「牛鬼」と、松明に映える満潮の須賀川に入り和霊神社まで神輿がさかのぼる「走り込み」が行われ、まちはエキサイトした。牛鬼は、鬼面、牛体、剣を形どった尾をもつ怪物で、赤布や棕櫚



の毛で覆われ、大きいものは高さ五尺、長さ七尺八寸。数十人の若者が担ぎ、子供たちが吹く竹ボラの音に合わせ、十四の牛鬼が長い首を振り振り廻り歩いた。どこかユーモラスでもある。加藤清正が文禄の役で敵を降すため使ったとされ、魔除けの効能があるという。幕末の宇和島藩は進取の気概に富み、日本で初めて蒸気船を建造した。独眼竜政宗の長子、秀家が藩祖となったことから、「宇和島さんさ」など仙台の影響が色濃く残る。両藩の間で本家争いが起こったこともあるが、現在は「伊達サミット」開催など交流が盛ん。島々や湾の外まで暮る海 東洋城ペンII五●カメラII松岡勉



WFC岐阜ファッションコンテストー岐阜県
ファッション界の若い才能を発見するため毎年開催
昨年の第八回大会には三十六カ国が参加

fashion ブランドづくり、人づくり

デフレ、ユニクロ現象、中国製品の流入などで、日本の産業の構造改革が急速に進んでいる。ことに、衣の分野で土俵際に追いつめられている産地・産業は多い。だが、それはニッポンの総論の話。逆境にあって元気にモノづくりに励んでいるところもある。頑固なまでのこだわり、地域オリジナルの資源の活用、一体となったイベントなどの点で共通している。今回、こうした事例を紹介してみる。

統一ブランド「アルティベリー」＝東京都台東区
台東ブランドの確立を目指し、コンテスト受賞作品の展示、ファッションショーの開催などにも熱が入る

織姫ファッションショー＝福井県今立町
町で作られた繊維と和紙を組み合わせファッションショーを開催。会場は若者の熱気に包まれた





糸蔵楽(いとくら)=山形県三川町

綴れ手織りで知的障害者のリハビリと自立を目指す工房糸蔵楽は、ボランティアの助けでベスト、帽子、袋物などを商品化



桐生ファッションウィーク=群馬県桐生市

50団体以上が参加する織物、衣、文化、食などの同時発信イベント。着物姿で茶席を巡る「着道楽inぎりゅう」など開催



久米島紬=沖縄県仲里村

図案を考えてから染め、織りまで最低半年はかかる。伝統にこだわる姿勢は、天然染料しか使わない染めにも表れている



ファッション甲子園=青森県

高校生のためのファッションデザインコンクールを開催し、全国から810校、4200チームが参加



きもの大園遊会=滋賀県長浜市

園遊会には、県外勢も含め毎年1000人以上の18歳以上の未婚女性が勢ぞろい



ローソクの家・群言堂

石見文化の商品化=島根県大田市

生活雑貨からファッション、さらにライフスタイル全般を石見地方独自の文化の視点から提案する



藤原作弥 日本銀行副総裁

リストラと地域活性化

六月末、福島を訪れた際に、本年から同市の名所旧跡の一つに加わった「旧日本銀行福島支店長役宅」を見学した。

「役宅」とは支店長の公邸のこと。市の南東に流れる阿武隈川の畔にある瀟洒にして豪壮な日本家屋である。部屋の数は大十室。宴会場、応接室があれば茶室もある。雪見、花見、花火見物など、昔は地元の政財界人の社交の場でもあったという。

往年の栄華が偲ばれるが、この文化財は今や日銀の所有物ではない。三年前、新日銀法が施行されてからリストラの一環として全国三十三支店の役宅はすべてマンション化することになり、福島支店の役宅も昨年、福島市に売却された。現在は観光スポットとしてだけでなく、市民のためにも開放されている。

福島を訪れたのは六月から七月にかけて開かれた福島・国際音楽祭のバイオリン・コンサートを聴くのが目的だったが、同音楽祭の仕掛人が安永隆則・日銀福島支店長。地元の経済人グループと地域活性化の議論をたたかわす中で、クラシック音楽ファンの同支店長のアイデアで実現したという。音楽祭は大盛況だった。

日銀の支店が地域活性化のお役に立っている例はほかにもある。

本年六月、北海道小樽市の市長、市議会議長、商工会議所らと話し合い、日銀小樽支店を廃止することとした。同支店の現金受け払いなど業務が激減したので日銀としては「廃止」の方針を打ち出し

たが、小樽市としてはその昔、「北のウォール街」といわれた小樽経済の象徴である日銀小樽支店の廃止には絶対反対、存続要望の署名も九万人に達した。

明治四十五年（一九一二）竣工の日銀小樽支店は、名建築家・辰野金吾博士が設計、東京駅舎や日銀本店と並ぶルネッサンス様式の歴史的建造物で、観光都市・小樽の目玉でもある。

半年間、数回にわたる懇談会を開き、市民の声を聞き合った結果、支店業務は廃止するが、支店の建物を活用し、金融資料館として再発足させる—という結論に達した。胸襟を開いて歩み寄り、双方のニーズを汲み上げた結果である。

旧日銀広島支店営業所も似たような例である。原爆ドーム・平和記念公園から南東三百八十メートルにある同営業所は、歴史的建造物としての価値も大きい。原爆の惨禍を伝える平和希求の象徴的建造物でもある。広島市の要望を容れて国の重要文化財指定までの間、無償で貸与することとした。広島市は市民の文化活動の場として活用している。

世の中は挙げてリストラの時代。日銀もその例外ではなく、新日銀法の精神の下、モノ、ヒト、カネの各分野でリストラの努力が続けている。しかし、廃止や縮減だけがリストラではあるまい。時代の要請に応えて「スクラップ・アンド・ビルド」による再生や新生の知恵を働かせることも「構造改革」と言えるのではないか。

ものづくり都市の再生が

地方の時代と言われて久しい。しかしこれまでは、一向に目立った進展は見られなかった。

さまざまな障害や理由があるからである。

しかし、中央の力に頼らず、地域の特徴を強く自覚、主張し、自らの努力によって

活路を開き、成果を挙げようとする地方の市町村の動きが見え始めてきた。

とくに「ものづくり」を核とした元気な「まちづくり」が話題を呼んでいる。



藤原 肇

(株)マーケティング企画代表取締役

日本を救う 要求される自治体の産業政策・ビジョンの策定

地域産業の時代

日本再生、地方の時代の実現には、地域経済の活性化が不可欠である。地域経済の中心は地域産業である。したがって、国際競争力を持った、特色ある地域産業集積地域が次々と日本列島に誕生し、育つことが、今、求められている。

かつての米国のシリコンバレー（最近では全米各地でほかにも新しい都市が誕生しているという）やミラノ周辺の北イタリアを中心とする地域産業都市の繁栄が国の経済を元気にしてきた事例を見るまでもない。そして幸いなことに日本にもその可能性が大いにある。

地域経済は地域産業が支え、地域産業は地域の企業と市民と学校や行政が支える。地域

産業には長い時間をかけてつくり上げてきた

草の根的な根強い産業基盤がある。その根が

腐ったり、枯れたりしてはとうにもならないが、まだまだしぶとい生命力を有してい

ると私は感じている。これが、日本の産業の

強みである。中央の大企業の分工場や支店の

誘致は、短期的には地域に大きな効果をもた

らす。しかし、その性格上、景気や本社の企

業業績いかんでいつ閉鎖・縮小するか心許な

い面がある。その弊害はすでに全国各地に枚

挙にいとまがないのはご承知のとおりである。

一般的には地場産業や産地の崩壊、ものづ

くり職人や伝統工芸技術の消滅が伝えられ

る。しかし、世界に通用する新しい発想で、

地域産業再生による元気なまちづくりへの挑

戦を推進している市町村や産地もたくさんあ

ることを忘れてはならない。

戦後産業構造の崩壊

中央中心の発想、大規模幻想からの脱皮も必要である。

中央の大企業や金融機関を中心に日本経済や産業構造を構想し、地方の中小零細企業はその下請け的地位に甘んずる、という戦後の高度経済成長時代の構図は崩壊しつつある。グローバル化と情報化によって、その位置はいまや中国を中心とする東アジアや地球全体にとって代わられている。

昨今の景気浮揚策がごとく失敗してきたのは、この事実に対する正しい理解や認識と配慮が欠けていたからである。

これからは、地域固有の特色を生かした地

域産業の育成・強化・世界化を図ることが地域行政の課題となる。

また、中小・零細企業、家内企業についても解釈を変えねばならない。中小零細という言葉のイメージは、生産性の低い、競争力のない、時代遅れの企業ばかりで、福祉的政策の救済対象としてのイメージが強い。しかし、現実にはそうした企業ばかりではない。規模は小さくとも、優れた技術、発想力豊かな経営者、高品質商品の製造力、デザイン感性を有し、元気で可能性のある企業も数多い。

国際競争力強化は大規模化のことではない。むしろ内容のしつかりした、小さな世界企業、小さくとも世界的な産業集積都市（地域）がたくさん育つことが、日本の将来を決める。

産官学民一体で

効率的投資・環境整備を

今、地域産業を地域ぐるみでいかに育て、成長させるか、という「地域産業の時代」が始まった。その一つが、ものづくりを核としたまちづくりの実践運動である。こうした動きが始まったのは、私の記憶では約十年前であるが、多くの都市が取り組み、その成果も現れ始めてきた。

国土庁（現国土交通省）の「MONOまちづくり事業」や通産省（現経済産業省）の「ファッションタウン事業」も同様の考え方

が基本にある。前者は全国約百都市、後者は約三十都市が関心を示して取り組んできた。

前者は、元気で快適なまちづくりをするには地域の「ものづくり」のありかたをきちんとし、産業振興とまちづくりを一体的に考えていくことが大事である、という考えであり、後者はものづくり（産業や産地）を元気にするには、まちぐるみでの応援や産業風土やインフラ整備などが欠かせない、というアプローチである。そしてその目指すところは、同



岡山県倉敷市のファッションタウン児島国際トライアスロン大会は、3500人のボランティアが大会を盛り上げる

じく産業が元気で市民が誇りの持てる、コンパクトで、活力があり、街（商店街、工場、住宅、公共施設、周辺環境なども含まれる）が美しく、市民が暮らしやすいまちづくりである。

従来の考え方からすれば、ものづくりは産業振興、まちづくりは都市計画と別々に考えられることが多かった。縦割り行政の影響も多い。しかし、新しい時代の地域活性化策は、市民、産業、行政が目標イメージを共有し、まちづくりの基本条件を相互に有機的に関連させ、産官学民の一体感の醸成と無駄のない投資と均整のとれた環境整備を進めることである。これらを通じて快適な暮らしづくりと人づくりも同時に実現していくことが期待される。

小さな工房が

ブランドを持つ時代

実際に地方の市町村のものづくりの現場を一つひとつ歩いてみると、びっくりするような技術を持ち、高い品質の製品をていねいに作っているところは枚挙にいとまがないほど日本国内にはある。ただ企画や販売、ブランドは中央の大企業のものであるために、下請けに安い工賃で、それでも誠実にものづくりにいそしんでいる。家族が食べられるならそれでよい、と現状に甘んじたり、あきらめたりしている。

百貨店の売り場をよく知っていたり、ブランドの開発などに携わっている身からすると、実にもったいない。

父ちゃんが生産、機械の補修など製造全般を受け持ち、母ちゃんが現場と経理を担当し、息子が営業、息子の嫁が情報収集と企画・デザインを担当すれば、企画からデザイン、製造、販売まで家族の中で完結できる。それどころか、息子夫婦がホームページを立ち上げれば消費者への直接販売も可能である。家族だからコミュニケーションは良いし、生産性も高い。その結果、生産量は同じでも数倍の利益を得ることができ、満足感も大きい。こうした家族企業が夢を持ち、新業態にチャレンジしていくようなまちづくりは、地域にも元気をもたらす。

最近、都市から地域に顧客を呼び込む「産業観光」に関心が高いのも同様の考えからくるものである。消費者も売り場も都会ばかりにあるのではない。製造現場が販売の現場にもなり、小さな工房がブランドを持つことも今後大幅に増えてくるだろう。これからは小さな工場の主人や職人がデザイナーになる時代である。

「地域から日本を変えていく」という新しい発想である。地域からの新しい動きが日本列島にあまねく連鎖反応を起こしたとき、日本再生のチャンスが生まれる。今、その萌芽が

全国各地に芽吹き始めた。

●●●●● 地域の宝の発見

地方の時代とは「地域産業再生・強化」の時代と言い換えてもよい。地域の自助、自立に必要な原資は、地域が中心となって地域自らの手で生み出さねばならない。それを可能にするあらゆる工夫や政策立案を地域が独自に始めねばならない。補助金や交付金を当てにせず、地域産業活性化とそれによる雇用拡大によって実現するのである。

地域産業は地域固有の歴史、伝統、文化、技術、風土、自然、人間性といった資源を生かし、地域ならではの気質や気概を持った産業・人材の集積が、知恵と努力を積み重ねることによって育ってきた。したがって、まず地域の宝が何なのかを発見、確認することが第一歩である。私の経験からすると、行政も市民も企業も、客観的に自己評価することに慣れていない。宝を大量に見過ごしていたり、その反面、どこにでもあるものを自慢してみたりする間違いはしばしばである。全国の事情に精通している産業、都市などの専門家の評価をしっかりと受けておいたほうがよい。

●●●●● オンリーワンの

商品・サービスの創造

高度情報化社会では、規模は小さくなくと

も、世界レベルの質や、世界でオンリーワンのユニークな特徴を有する商品やサービスを開発・提供する企業やビジネスモデルにはすぐ世界が注目し反応する。そうした企業が続々と輩出し、集積していく地域は繁栄し、国際的にも評価が高まり、世界化していく。そうなれば、資金も人材も情報も全国・世界から集まってくる。そのような好循環構造の構築をまち全体の仕組みとして定着させることである。

●●●●● 和文文化に世界が関心

同質のものでは今後、世界との競争は一層厳しくなる。しかし、その一方では、世界市場を相手に活躍するチャンスも新たに生まれつつある。

とくに、日本文化への世界的関心の高まりは大きなチャンスを期待させる。

漆器、和紙、陶磁器、和服、浴衣、雑貨など伝統工芸品は、そのコンセプトや精神、テイスト、デザイン感性を温存しながら、世界のライフスタイルに受け入れられるようなマナーチャレンジングや市場開発努力を怠らなければ、必ず大きな市場を発掘するだろう。とくに浴衣は世界商品になる可能性を有している。欧米が本場のファッション衣料でも、素材を和紙、竹の繊維を使用し、藍染めや絞りなどの伝統技術で染色したり、漆を使用す

るなどの工夫によって、世界のどこにもない風合い、色感を表現することも可能である。また漆器は、ヨーロッパ、アメリカ市場への進出が工夫によっては大きな可能性がある。

成功した桐生・児島の市民運動

こうしたまちづくりは一種の地域全体の運動である。したがって、地域の住民が、わがこととして取り組みねば、運動は広がらないし、成功はおぼつかない。産業を代表する商工会・商工会議所、商店街、市民の代表である自治会、市民団体、NPOなどが相互に連携をとりながら推進していく必要性がある。群馬県桐生市の商工会議所、商店街、青年会議所が一体となり、全市を舞台に推進している「ファッショントウイーク」や岡山県倉敷市児島地域の「ファッショントウイーク」や岡山県倉敷市ライアスロン大会」などは一連の総合的運動の中のイベントの一つにすぎないが、成功例としてインパクトが大きい。

桐生市は和服、洋服用途のテキスタイル（織物、ニット、レース）や刺繍、縫製品で独特の製品を生みだしている。児島地区は学生服、ジーンズ、ワーキングウェア、カジュアルウェア、豊縁、テキスタイル、染色などの企業集積で著名である。計画策定にはアンケートをはじめ地域住民のほとんどが年齢、性差に関係なく参加し、プロ顔負けの手づく

りの計画をつくり上げた。とくに自治会の活躍には驚嘆すべきものがある。どちらも全国、世界を意識した市民活動となっているのが素晴らしい。

大きい自治体の役割

この「もの・まち・くらし・ひとづくり」

一体化による地域活性化推進における自治体

「もの・まち・くらし・ひとづくり」を三本柱にした福井県鯖江市のファッショントウイーク運動の一つ、河和田地域の軒下工房の探訪マップ



の果たす役割は大きい。ソフトとハードのインフラ整備は行政の担当になる。また、従来の縦割り発想では対応できないので、全庁対応、スピーディーな意思決定と行動が要求される。

特筆すべきは現市長が選挙公約を果たす形で、市長を筆頭に行政主導で推進している福井県鯖江市のファッショントウイーク運動である。庁内にファッショントウイーク推進協議会を設置し、事務局員は市から出向している。鯖江市は眼鏡、越前漆器、繊維で有名であるが、すでに多くの実績を上げている。EU市場開拓のためイタリアのミラノに事務所の開設、高齢者の雇用促進を目的とする「株いいききサービス」の設立と稼働、中心市街地活性化事業への取り組み、漆器の職人による軒下工房ショップ、漆器卸業者によるのれん会直販ショップ開設による「うるしの里づくり」など産業観光への取り組みなどの実績がある。

市町村レベルで産業政策や産業ビジョンを策定しているところは実に希有である。これまでは通産省が考え、都道府県がこれを実施してきたからである。しかし地方の時代は、市町村レベルでも、産業政策を立案し、地域の産業の将来をしっかりと見据えて、ものづくりを中心にしたまちづくりを推進すべき時代がきていることを強く提案しておきたい。

ファッション甲子園で高校生デザイナー発掘 コンクールに全国から4千2百チームが応募



白取 功
青森県生活文化課

県がファッション振興ビジョン

「ファッション甲子園」といっても、何のことかさっぱり分からない方がいらつしやると思う。簡単に言うと、高校生による高校生のためのファッションデザインコンクルのことである。青森県では、平成十二年三月「青森県ファッション振興ビジョン」という県の指針を公表した。これは、全国の自治体、たぶん世界でも類をみない試みだと思っている。なぜ行政がファッションに関する方針を出すのか、ほとんどの方は奇異に感じることと思う。しかし、私たちは、一つの流れにしたがつてこのビジョンを提出したつもりである。

県では、二十一世紀は生活のゆとりや潤い、人を思いやる心、美的な感性、創造性などが重視される「文化の時代」であるとの基本認識に立ち、九年一月に「青森県文化振興ビジョン」を策定した。折しも、三内丸山遺跡の出現や白神山地の世界遺産登録など、青森県が文化的な面で内外から脚光を浴び、県民の文化に対する認識がかつてないほどの高まりを見せている時期にあったように思われる。

さて、このビジョンの特徴として、二十一世紀にも生活文化の充実が重要であるとの認識のもと、生活を根底に据えた視点を取り入れたことが挙げられる。さまざまな考え方があるにせよ、生活文化といえは、衣食住の問題と切り離すことはできない。文化振興ビジョンの中では「青森県がファッションの創造・発信の拠点になる」との方針を打ち出している。一方で策定委員会からは、ファッションに関する議論は文化振興ビジョン策定後、別途なされるべきであると指摘されている。

このため、九年、「青森ファッション創造発信検討委員会」を設置し、「青森県がファッションの創造・発信の拠点になる」ことが可能であるかどうかについて検討をお願いし、十年にはこの委員会から知事に提言書が提出された。

この提言のエッセンスは、「青森県がファッションの創造・発信の拠点になることは可能であり、二十一世紀に向けて行政が着手してもいい分野である。ただし、県民にとつては分かりづらいと考えられるので、ファッ

ション振興のための基礎的調査を実施し、県としての基本的な方針を県民に提示すべきである」というものであった。

これにしたがい、十年、十一年の二カ年間にわたって調査を実施し、国内の識者からの意見を取り入れて策定したのが「青森県ファッション振興ビジョン」である。このビジョ



第1回ファッション甲子園優勝作品「曇」
(東京都代表女子美術大学附属高校・OQ003)



ンの三本柱のひとつが「二十一世紀のファッションを担う人材の育成」。これが「ファッション甲子園」を企画する源になり、「ファッション甲子園」の最大のテーマとなった。

このプロジェクトの構成では、ファッションデザイン画を提出するだけでもいくつかのハードルを設けてある。三人のチームを作ること、チームの中にあらかじめモデルとなる人物を入れておくこと、先生の名前を借りることだ。そして、各チームはデザイン画を作成し、期日までに事務局に提出する。これを六人の審査員が厳正に審査し、一次審査通過チームを決定、通過チームは、実際の衣服に仕上げ、八月の最終審査会においてこれをファッションショー形式で発表する。三位以内に入ればご褒美は夢の「東京コレクション視察」である。この根底にある考え方は、「二十一世紀の創造活動はコラボレーションが主流」「若者が夢を失った。だから夢の創造」「教育が大変。だから教育プログラムで」なのである。

八月八日第一回全国大会

昨年は、青森、岩手、秋田三県を対象地域に十五万人に呼びかけ実施したところ、八十九校、二千八百二十四チーム、延べ一万人以上の高校生の参加があった。日本のファッション界の先端を担っている今回の審査員からは、技術的にも最高、プロジェクトの内

容も最高との評価をいただいている。また、参加高校生からは苦しい思いもしたが協力することの大切さが分かったなどの感想が多く聞かれた。現場の教師の方々からも教育的な効果が極めて大きいなどの声が上がっている。昨年七月の最終審査会は、会場に立ち席ができるほどの千六百人の県民の皆さまに見守られ、成功裏に終了したものと理解している。

この結果を受け、本年は、全国規模で実施することとした。全国大会の根底にある考え方は、「青森県の売り込み先ターゲット四百二十万人、平均余命七十年の人々」「青森のサポーター、青森ファンを創る」「青森県の高校生のため、だから全国の高校生が必要」「日本の十代はコーディネート新しい世界旗手」「プロジェクト誘致の時代から、プロ



ジェクト創造の時代へ」「問われる地域の成熟度、東京タワーかお台場かそれとも宇多田ヒカルを創るのか」などである。

八月八日、青森県武道館は熱気と興奮に包まれていた。千八

百人の観客が見守る中、一次審査を通過した四十四チームの若い力がはじけ飛んだ。

四十七都道府県、四千二百チーム、九千二百点の応募の中から栄えある第一回目の優勝は、東京都代表女子美術大学附属高校に決まった。それぞれのチームは審査会の前日まで発表作品の微調整に努めるなど、悔いのない最終審査会を迎えてくれたものと理解している。第一回目の全国大会にもかかわらず、県民の皆さんの協力、さまざまな方面からのご注目・ご声援をいただき大変ありがたく思っている。

ト レンドセミナーも企画

本年度はこのほかにファッショントレンドセミナーという催しを企画している。

これは、パリ、ミラノ、ロンドン、ニューヨーク、東京のいわゆる世界五大コレクションを取材したファッションジャーナリストが、この十一月、取材終了後青森に直行し、世界のトレンドを紹介するというものである。普通、コレクションの模様は、早くても二カ月後でなければ、雑誌などには登場しない。青森が日本の中で一番早く二〇〇二年の春夏のファッショントレンドを知ることができるといえることである。なかなか、愉快な話だと思いませんか。近く告知をする予定となっておりますので、興味のおありの方はどうぞ、いらしてください。

ぬくもりを織る 障害者の生きがい、自立目指し



飯野美世枝
鶴美工房糸蔵楽代表

目の届く限り見渡せる日本有数の穀倉地帯、庄内平野の真ん中に位置する三川町は、人口八千人弱、総面積三三・二一平方キロの小さなまちである。北には出羽富士と土地の人口が呼ぶ鳥海山がそびえ、南には霊峰出羽三山を仰ぎ、西には日本海と、四季折々自然の大変美しいところである。空いっぱいの鰯雲を裾ほかしの着物のように染め上げ、刻々と空の色を変えながら夕日が沈んでいく様子など、日々それぞれに違った情景を見せてくれる素晴らしい所だ。

こんな広い空の下で今、私たちが取り組んでいる「糸蔵楽」はひとしずくのような小さな活動である。

すべてボランティアの手で立ち上げ

三十年余り綴れ織（爪織本綴れ）を織ってきた私は、老後はお返しの人生活として何かしたいと思い続けてきた。ある朝、綴れを織りながら聞いていたラジオで「さおり織」の創始者である城みさをさんのお話をお聞きした。知的障害者に関する話であった。「教えないで引き出す教育がある。知的障害

とは知的にものが入らないことをいうのであり、彼らには素晴らしい感性がある。彼らの思うままに色を選ばせ、織らせてみると規制概念にとらわれない素晴らしいものが織り上がる」「それまで、あれも駄目、これも駄目と抑えられてきていたものが、自分の好きな材料や色で織らせ褒めてやると、彼らは生き生きとしてくる。自己も育ち、リハビリにな



る」という情熱的な城さんの言葉が私の心をとらえた。織物だったら私もお役に立つかもしれないと、連絡先を聞き、さっそく大阪の城さんをお訪ねした。

現場を拝見し、技術的には何とかなると確信して帰ってきた。反面、今まで遠くから見ていた知的障害者とうまくやっていけるだろうか、また織り上がったものを商品として世

に送り出せるだろうか、不安がいっぱいであった。

施設で働いている友人からは「それなら決意の崩れないうちに始めたほうがよい」とのアドバイスがあり、また養護学校に出かけたところ、わが町でも面倒をみる人が必要であることが分かり、決意を固めたのである。

次は商品化が問題になってくる。アイデアの豊かな婦人会の元会長に製品づくりなどについて協力を依頼。名前は仕事場が土蔵の中からの出発ということで、「糸蔵楽（糸を楽しむ蔵）」と名付けた。知的・精神的に障害のある人たちのリハビリと自立、社会参加を目指し、すべてボランティアの人で立ち上げた。

糸蔵楽の設立資金は、これまでこつこつ蓄えた分と不足分は借金でまかない、織機は使用勝手の良いように私が考案した。最初は四台だったが、現在は十台ほどになっている。設立当時十分だと思っていた織り場も狭くなり、増築した。私のできる限りのボランティアである。

楽しく手織り

現在、糸藏業には養護学校高等部卒業などの年齢十九歳から四十五歳までの二人ずつの男女計四人が、月曜日から金曜日まで通っている。簡単な清掃をすませ、ラジカセに自分の好きなCDを入れ、音楽を聞きながら仕事に入る。午前と午後三十分ずつの休憩と一時間半の昼休みを取りながら、一人一台の織機で手織りをするのが主な仕事であり、四人は毎日喜んで通ってくる。年に十二回はお楽しみ会など行事がある。心配した知的障害を持つ彼らとのつきあいは案ずるより生むがやすしで、純真むくな彼らにはむしろ教えられることばかりだ。この純真さは、人間の心を優しくしてくれる。ボランティアの方たちもみなここにここと接している。

彼らの織り上げる布は優しい色合いとなり、本当に手織りのぬくもりそのものである。素晴らしいベストやスカート、帽子、袋物などに生まれ変わったときは本人たちの喜びもひとしおであり、親御さんの喜びを思うと、涙の出るような気持ちにさせられてくる。

行政も援助の手を

現在の運営資金は私がいただく職親手当てと製品の売り上げ、それに町からのささやかな援助でまかなう。彼らの織った布を縫製したり、帽子などに仕上げるのは約二十人のボランティアにお願いしている。それでも

一人は常時手伝いが必要で、身内の者と頑張っている。現在まで、作業所の認可は受けていないし、補助金も交付金もなし、親御さんの負担金もいただいていない。そのような状況の中、当然ながら少ない金額ではあるが、彼らには給料を出している。本人たちの自覚と励みになるようだ。本当に苦しい台所事情であるが、これが成り立っていけば彼らの自立を助ける場になると思われる。

彼らの電波をキャッチするには、大きな施設よりも私たちのような小さな所のほうが生き生きと過ごさせてやれるし、地域に果たす役割も大きいと自負している。行政もこのような所にも目を向け、手を差し伸べてくださるよう声を大にしてお願ひしたい。

最初は小さな歩みであったが、少しずつ理解していただけるようになり、昨年まちにできた「道の駅・物産館マイデル」でコーナーをいただいで販売している。

現在は自分も織りを楽しみながら、ボランティアや鶴岡市の国際ソロプチミストなど多

くの方々に支えられながら、小さいながらも着実に歩を進めている。

今年六月の一カ月間、町の企画課のお力添えで、庄内空港に展示させていただいた。ボランティア一人ひとりが精一杯のアイデアを出し合い、五時間かけて飾りつけてもらった。

毎月第二、四水曜日午前中がボランティアの日

庄内空港での展示



飾ってあるものが手織りのぬくもりならば、飾るプロセスも手づくりのぬくもりだ。手織りは、計算のできない、規格にはめることのできない、二度と同じものを作り出せない、そのときの感性で作りに上げるものであり、温かく尊いものと思っている。

ファッションウィークで織都アピール 産官学民が連携し20のイベントを集中展開



石原雄二
桐生商工会議所
総務課課長補佐

桐生市は群馬県の東端に位置し、自然に恵まれた地方都市である。人口は十一万七千人、南は太田、伊勢崎市、東は栃木県足利市に接し、東京から百⁺圏内という立地を生かし、古くから織物のまちとして栄えてきた。

三方を山で囲まれた市街地には渡良瀬川と桐生川が流れ、歴史をしのばせる家並みと近代化された商店街があざやかな対比を見せている。「西の西陣、東の桐生」と言われたほどの桐生織物の繁栄を背景に、自治の精神と進取の気性に富んだ独自の文化が生み出された桐生市だが、産業構造の変化、人口減少、中心市街地の地盤沈下など課題は多い。

桐生の衰退に危機感

今、桐生市は、ファッション（生活文化）を切り口にしたまちづくりにより産業と地域の活性化を図ろうとする運動を展開している。

平成八年の秋、第一回「桐生ファッションウィーク」が桐生市の中心市街地で開催された。「このまち浪漫」「産業と文化のまつり」をテーマに、二十一のイベントを一週間に集中して展開し、織都である桐生をアピールした。

もともと秋の桐生では多くのイベントが行われていた。ただ、散発的でイベント間のネットワークも薄く、それぞれが独自の運営をしていた。これらのイベントを一つに束ね、同時多発効果を狙って企画されたのが「桐生ファッションウィーク」だった。

その背景には、桐生の衰退に大きな危機感を抱き、まちづくりに熱い思いを注いでいた多くの人たちの存在がある。当時、桐生市は行政の指針である第三次総合計画で「ハイテクとファッションのまち」をキャッチフレーズにしたまちづくりを進めていた。商工会議所は平成六年にファッションタウン構想を策定、その具現化に向けて調査・研究事業を行っていた。また、桐生青年会議所は豊かな地域資源を基に、新しい生活文化情報を発信するまち「生活文化都市・桐生」計画を抱えていた。そして商店街関係者やさまざまな団体、市民たちは、それぞれの立場で活力ある地域づくりにつながる活動を展開していた。

「同じ方向を向いているのなら、連携して一つのことに取り組んだらどうか」。青年会議

所が企画したパネルディスカッションの中で提案がきっかけとなり、半年もしないで一気に立ち上がったのが「第一回桐生ファッションウィーク」だった。

青年会議所が連絡調整役となり、組織化された実行委員会は、回を重ねるたびに参加者が増え、会議の会場となった桐生倶楽部（大正期の建築物、近代化遺産）は異様な熱気に包まれるほどだった。こうして十一月一日から五日間にわたり二十一のイベントが展開された。江戸時代の織物取引市「紗綾市」を現代に復活させた「きりゆう紗綾市」、桐生のテキスタイルを素材にしたファッション・コンベンション「テキスタイルin桐生」、着物を着て街中のチェックポイントを巡る「着道楽イン桐生」などファッション系のイベント、郷土の再認識を目的とした「ウォークラリー」、商店街・路地裏イベントなど多彩な内容が盛り込まれ、大盛況に終わった。そのほとんどが市民の手づくりによるもの。連携しネットワークすることで、見事な同時多発効果を生み出した。

●ものづくり仲間づくり事業



蔓の採取から手がけるアケビのカゴづくり



基礎から学ぶ手織りの技の挑戦

●桐生学(連続郷土講座)



講座「桐生祇園と鉦と屋台と…」



講座「岩宿の発見と相沢忠洋」

フ

アッショントウン構想も加速

市民や各団体の間に築かれたネットワークは、ファッショントウン桐生推進協議会の組織化を加速させた。同協議会は、桐生商工会議所が提唱してきたファッショントウン構想の具現化を図るための推進母体として設立準備が進められていたが、第一回ウィーク翌年の平成九年五月、産官学民約四百人のメンバーを集めて発足した。ウィーク関係者が多く参加したことは言うまでもない。

ファッショントウンとは、地域産業のグローバルな発展を図りつつ、その地域が有する伝統・歴史・自然環境などの地域固有の資産と融合しながら、内発型で個性的なまちづくりを推進する運動だ。協議会の事務局は桐生商工会議所内に置かれ、内部に①生活文化②産業活性化③まちづくり④FTネットの四つの専門委員会を設置した。

生活文化委員会は、桐生の暮らし、ライフスタイルを考え、優れた生活者を顕彰する

「桐生ファッショントウン大賞」の実施、「ものづくり仲間づくり事業」、からくり人形の復元支援などの活動を展開。

産業活性化委員会は、ものづくりや産業観光のシステムを考え、商店街の活性化などに取り組む。桐生で産出するさまざまなモノを商店街の売場機能と連携させて、新たな店舗空間を演出し、地域内流通を提案する「一店一作家(工場)運動」は全国的にも注目を集めつつある。

まちづくり委員会は、都市計画や環境問題、近代化遺産の研究や交通体系などを考え、市内に約三百棟残るノコギリ屋根工場や近代化遺産の活用を研究し、市民の心がづくり出す風景を顕彰する「わがまち風景賞」を創設した。

FTネット委員会は、インターネットによる情報発信を担当するほか、連続地域セミナー「桐生学」を企画している。

協議会発足から五年目。各委員会内には多くのプロジェクトが生まれ、さらに活動を拡大、民間主導によるまちづくりは産業界や行政の

支援を受けながら、着実に動き始めている。

ファッショントウンウィークは協議会とは別組織の実行委員会により運営され、今年で六回目を迎える。昨年は五十一団体が参加し、過去最大の規模だった。ウィークを支えたのは、産業界の団体や市民、大学、高校、商店街、美術館、博物館、お寺や神社など多種多様な組織、アート、伝統工芸、文化、歴史、ファッション、音楽、食などのさまざまな催しが秋の桐生のまちを彩った。

今年も青年会議所主導により実行委員会が立ち上がり、具体的な準備に入ったが、国民文化祭の桐生プログラムとして企画されているファッショントウンウィークやファッショントウンシンポジウムの開催とも重なり、さらに同時多発効果が期待される。実行委員会では、ファッショントウンウィークを「ファッショントウン桐生を集中的にアピールするまちづくり運動週間」として位置付け、市民による熱い取り組みが今年も始まっている。

台東区の地場産業が統一ブランド 靴など5業種がモノづくりのまちアピール



横田浩次

台東区産業部産業振興課
産業振興担当係長

若手デザイナーによるファッショングッズコンテスト入賞作品



台東区は、上野・浅草の繁華街を抱え東京を代表する観光のまちとして、全国に知られているが、意外と知られていないものも、たくさんある。

普段使われているファッショングッズ、靴・かばん・バッグ・ベルト・帽子もその一つで、全国でも有数の生産・出荷量を誇っている。これらは、台東区の重要な地場産業として昔から地域経済を支えてきた。

しかし、長引く景気の低迷による消費の落ち込みや外国製品の流入などで、これらの業界も非常に厳しい経営環境に直面している。

事業再構築で若者へアピール

台東区では、業界の活性化やデザイナーの育成に向け、地場産業の一層の振興を図るため業界と一体となり、昭和五十三年度からファッションフェアを実施してきた。当初は、地元の浅草公会堂で靴やカバンなどをPRするためにファッションショーを実施し、五十九年度からは、メーカーによる靴やカバンなどの製品創作コンテストを、平成二年度からは学生によるデザイン画コンテストを加

え、事業を拡大してきた。

二十一年目を迎えた十年度の、一つの区切りとしてこれまでの事業を見直し、再構築を図ることにした。台東ファッションフェア検討委員会を組織し、メンバーも、ファッションセンスを高める意味からできるだけ若い人を加えた。そして、事業コンセプトを「製品や技術のオリジナリティ拡大と質的向上を通じて、厳しい国際競争に耐えうる企業体質を確立する。また、そのために必要な人材の育成やオリジナル製品の普及に努める」と定め、事業分野を、①最新のファッション動向や新しい製品製作・経営方向について情報を提供する「セミナー」②オリジナリティあふれた作品や消費者ニーズを敏感にとらえ、ハイセンスで技術的に優れた作品製作のための「ファッショングッズコンテスト」③コンテスト入賞作品やオリジナリティに富んだ製品またはメーカーを広くPRし、台東区の「ものづくり」の周知を図る「フェスティバル」——の三本柱で展開することとした。

十年度の「フェスティバル」は、若者に直

接アビールし消費者ニーズをつかむため会場を浅草からファッションのメッカ原宿に移し、内容も従来からのファッションショーに加え、コンテスト受賞作品の展示や職人による製作実演、トークショーなどを盛り込んだイベントとした。さらに、来場者などの要望に応え、一部の受賞作品については受注販売を実施し、百点余りの実績を上げることができた。

企業・行政一体でアビールの振興を推進

十一年度のファッションフェアは、前年度の企画が一定の成果を収めたことから、これをさらに一歩踏み込み、台東区の地場産業の活性化を促進させることを目指した。

これまで、台東区の企業は長年にわたってものづくりに専念してきたため、ものを売ることに関しては職人的気質から不器用なところがあつたのは確かだ。

そこで、台東区の高い技術力やデザインの優秀性を直接消費者にアピールするため、行政と業界企業が一体となり、ブランド販売をすることとなった。それが、台東ブランド「アルティベリー」である。

「アルティベリー」は、職人を表す「アルティザン」と、究極を意味する「ベリー」の合成語で、台東区のものづくりの土壌で、長年にわたって培われてきた高い技術力から生み出されたものという意味を込めたもので、

商標も登録した。

アルティベリーは、「アルティベリーコンペティション」でグランプリを受賞した作品を対象に、グランプリ受賞者とファッション評論家・流通関係者で、プロジェクトチームを結成して作品への改良を加え、アルティベリーとして売り出す商品へとリメイクした。そして、十一年十二月の原宿クエストホールのフェスティバルで台東ブランド「アルティベリー」としてデビュー。

アルティベリーの商品販売は、株丸井の協力を得て、十二年三月から四月にかけて、マルイワン渋谷店・マルイワン新宿店で、それぞれ二週間、期間限定販売を行った。

業界・区でオリジナル商品の開発へ

しかし、これで安心はできない。今回は期間限定、初めての試みという話題性もあり、マスコミからも大きく取り上げられたことも考慮しなければならぬ。今後これを定着させていくためには、もっと多くの企業がアルティベリーに参加できる環境づくり、年間を通じた販売戦略、技術・デザインレベルの確保などまだまだ多くの課題がある。

また、売り場の声としては、「製作時と販売時が半年以上あいてしまうので、季節感にずれが出てしまう」「受注販売なので、売り場ですぐに品物を手に入れることができない」「アルティベリーを説明できる人が売り

場に常時いる必要がある」などであつた。

このことを踏まえて、「アルティベリー」ブランドプロジェクト参加企業十社と、モードクリニシユエの平川武治氏によるシーズンテーマをもとに企画し、イメージづくりしたバイヤー向けの展示会を今年の四月下旬に原宿で開催、たくさんのバイヤーやプレスの方が出席した。現在は、平川武治氏を中心としたブランド事務局を設置し、十一月の展示会に向けて準備中だ。今まで以上に、企業の経営者、デザイナーと区が三位一体となり、地場産業の改革に取り組んでいくつもりである。

台東ブランド「アルティベリー」は今、第一歩を踏み出したところだ。業界のチャレンジ精神と行政の積極的なプロモーションとが相まって、近い将来アルティベリーが安価なアジアの製品やヨーロッパのブランド品をしのぐ日が来ることを信じている。

その日のために、消費者の求めるオリジナルティ、オンリーワンのものづくりを目指して、業界と一緒に区も頑張っていきたい。

新宿ルミネホール(平成12年)で行われたコンテスト受賞式



越前和紙と地場織物とのハーモニー 県内若手デザイナーが織姫ファッションショー



佐々木哲夫
今立町産業振興課

今立町は、福井県のほぼ中央に位置し、JR駅を持つ武生市と鯖江市に隣接している人口一万四千人足らずの町である。町の広さは四十五平方キロで、その七〇％を森林が占めている。

町内のクラブなどが実行委員会

織物や和紙など千五百年の歴史と伝統に基づいた地域産業が息づいてきた今立町は、伝統技術と文化のまちとして栄えてきた。

織物は、町の主要産業として、リボン・ベルベット・羽二重などが生産されている。

また、越前和紙は、日本最大の手すき産地であり、ふすまの生産を中心に絵画用紙などさまざまな紙をすいてきた。

近年、和紙を糸にし、それを編んで布にする「紙布」づくりが近隣の大学や県内の産業技術センターと連携して開発が進められている。また、布の生地には和紙を張り、室内装飾用の壁紙としても製品化されており、さまざまな取り組みの中で和紙と織物の融合が始まっている。

二年前の秋に、町内の音楽やファッション

展示などの表現活動をしているグループ・織姫クラブや今立町繊維産業協会の有志、デザイナーを学ぶ青年などで実行委員会が結成され、昨年三月に「いまだて芸術館」の支援を受け、和紙と織物の素材を活用したファッションショーが開催された。

その中心的な役割を担った織姫クラブのリーダーにショー開催の動機をたずねてみると、和紙と織物を連携したファッションを企画する意識が高まり、支援する友人のネットワークもあり開催を思いついたと答えている。

参加した県内若手六人のデザイナーが、町で作られた羽二重、リボン、レース、畳縁、蚊帳地など約十種類の繊維と和紙をふんだんに使ってざん新な作品作りを行った。当日会場は、大盛況で県内から五百人ほどの若者たちが駆けつけ異様な熱気に包まれた。

ショーは、参加した実行委員の熱意によって開催され、全員ボランティアで準備から片づけまで手づくりで実施された。関係者の中で、織物と和紙の融合の可能性が盛んに語られ始める一方で、ボランティアの熱意で開催

されたショーの継続開催には、いくつかの課題も残された。

伝 統産業立て直しへ連携

低迷している経済情勢の中、とくに町の繊維産業の状況は非常に厳しいものがある。平成二年に百五十二あった事業所が、一年には百五に激減、工業出荷額は三三％も減った。町としても、主要産業の厳しい状況に對し何らかの支援策を講ずることが急務となっていた。

そのため、昨春秋に中心メンバーである織姫グループの有志と、繊維産業協会役員との第一回の話し合いの場に町も参加し、今回のファッションショー開催に向けた企画案を検討した。

その話し合いの中で次回は、町の繊維産業協会を企画運営の中心に据えること、和紙組合との連携を積極的にもつこと、町も今後、積極的に支援することなどがテーマとして話し合われた。

六年に町の繊維産業の活性化を目指して結成された今立町繊維産業協会では、活動の見

直しが始まっており、地域の繊維製品を生かしたファッションショー開催の意義が評価され始めている。

この機会に地域の主要地場産業である越前和紙との連携も図りながら、日本一の紙すき産地である越前和紙の里に訪れる観光客をターゲットに、織物のPRを兼ねた販売促進を図ることなどが話し合われた。

このいくつかの企画案は、役員会で練り上げられ、県の繊維協会の助成事業の認定を受けることになり、活性化にむけた繊維産業協会の取り組みは、静かに始まっている。

今年五月の「織姫ファッションショー」

は、繊維産業協会が主体となり、和紙組合や織姫グループ・福井文化服装学院の協力のもと、五十人に及ぶ実行委員会の体制で開かれた。この動きに、町も助成金支出や県の助成獲得など積極的に支援した。

会場となった芸術館では、玄関に入るとすぐのホワイエでは、町内繊維事業所産品の展示即売コーナーをはじめ、地元在住の若手デザイナーの作品コーナー、さらには手織りや紙人形・和紙照明などのクラフト展が開かれ、これらを見ながらホールに入る。

ホールでは、ショーが開催され、篠笛とシンセサイザーの演奏、ショーを盛り上げるために地元の織維で作った衣装をまとったYOSAKOIダンスパフォーマンスの舞台と続

いた。そして、三人の若手デザイナーたちによる地元産品の織物と和紙の素材を使ったさまざまなデザインによる作品六十点のファッションショーが、五百人を超える観客の歓喜の中で開催された。

この成功を受けて一カ月後、繊維産業協会は、来年に第三回のショーの開催を決定している。

織姫ファッションショーのフィナーレ



体験コーナーなど観光拠点整備へ

今年の繊維産業協会の取り組みは、ファッションショーにとどまらず、観光拠点である和紙の里通りに織物のPRコーナーを充実し、奉書紬の展示や沙織機の実験コーナーの実現も狙ったものとなっている。

また、町内の織物工場を見学し、織物に関心も持つてもらうとともに直販の機会をつくるために、工房見学の整備やマップ作成も計画している。

さらに、十一月に港区の全面的な支援を受け、東京の六本木の廃校で町が開催する特産フェアに、繊維のPRと販売促進のため繊維産業協会も積極的に参加することになっている。

経済不況と激しいライフスタイルの変化の影響を受け、繊維や和紙産業は、非常に停滞している。これを乗り越えるためには、連綿と培ってきた伝統技術をもとに新しい技術やデザインを織り込みながら、従来にない素材の開発が求められている。まさに繊維と和紙の融合による新しい素材は、一つの試みとして注目を浴びてくるものと思われる。

今立町では、今回のこの事業を通じて、繊維事業者が頻繁に会合を重ねる中で、互いに連携し合い情報交換が活発化しており、その推移を期待したいと思っている。

世界の工房「GIFU」へデザイン力強化 WFCで学生の才能発掘

岐阜は、東京・大阪と並ぶ日本三大アパレル産地の一つに数えられ、岐阜市周辺地域は、製糸、紡績などの川上から製品の川下までのすべてのプロセスを有する全国的にもたぐいまれな地域である。

現在、JR岐阜駅前の問屋町周辺には、約八百社、さらにその周辺地域も含めると千五百社ものファッショ関連企業が立地し、地域経済の担い手として大きな役割を果たしている。

しかしながら、本県为中心的な地場産業の一つであるアパレル産業においても、ほかの地場産業と同様に、グローバル化が進展する中で、成熟化、輸入品との競争激化により業界を取り巻く環境はますます厳しいものとなってきた。

迫られるアパレルの構造改革

こうした中、岐阜県では、これまでの下請け体質から脱却し、将来を担う若者に魅力ある雇用の場を確保していくために、産業の情報化、デザイン力の強化、新産業の育成などを積極的に進め、競争力の強化、産業構

造改革に取り組んでいる。とりわけ、アパレル産業に代表される地場産業のプロダクトデザイン力を高め、世界に通用するGIFUデザインを開発していくことが喫緊の課題であると考え、産業デザインの振興を県政の重要課題と位置づけ積極的に事業を展開している。

昨年七月には、JR岐阜駅高架下に、岐阜市の中心市街地の活性化と地場産業の振興などを目的とした複合商業施設「ワールド・デザインシティ・GIFU（愛称アクティブG）」がオープンし、現在進行している駅周辺の再開発と同時に、アパレル産業の一層の発展の起爆剤となることが期待されている。また、この施設の目玉である三階の「TAKUMI工房」には、ファッション、陶芸、刃物、木工、和紙、ガラス、セラミックなどバラエティに富んだ約四十の工房が入居し、国内外のアーティスト、デザイナーらが集い、創作活動や製品の販売などを行っている。この幅広いアートが集積した「TAKUMI工房」が世界の一大デザイン拠点として、これからさらに成長していくことが期待されている。

そのほかにも岐阜県では、県民のファッション意識の向上とアパレル産業の活性化、岐阜ファッションのイメージアップと、ぎふブランドの確立を目指すため、関係団体と連携しながら、国際的なイベントなどを開催してきた。

WFCが徐々に効果

その一環として毎年開催されている「WFC岐阜国際学生ファッションコンテスト」は、未来のファッション界をリードする若い才能を発見し、その飛躍をバックアップするために開催するもので、世界の学生ファッションデザインコンペティションを決定するコンテストだ。

このコンテストは、テーマに沿った作品をデザイン画で募集し、その中から一次審査を行い、入賞作品五十点を選出する。そして、その作品を入賞者本人が縫製し、プロのモデ



棚橋幸治

岐阜県商工業課商業振興係



アクティブG

ルを使ってファッションショー形式で審査するというものである。

昨年開催された第八回大会では、「CHI C（シック）」というテーマのもとに、国内外の学生さんから一万六千七百四十点もの力のこもった作品を応募していただいた。このうち海外からも三十六カ国、千三百三十二点の作品の応募があり、国際的なファッションコンテストとして定着しつつある。

審査員長には、ジバンシイの一番弟子であり、パリ・オートクチュール界に新風を送り続けているドミニク・シロ氏、審査員には、中野裕通氏ほか国内外から一流デザイナーらをお迎えし、華やかな中にも厳粛なムードで審査会が行われた。

また、審査員としてお迎えした中国・ベトナムで活躍中のリュイ・ユエさん、チャン・ティエン・ガーさんのコレクションを紹介する「共創するアジアン・モードリュイ・ユエ&チエン・ティエン・ガーコレクション」を発表会と併せて開催し、会場に詰めかけた約二千人の観客を魅了した。

このコンテストも、今年で九回目を数え、入賞者のレベルも、回を重ねるごとに着実に向上してきており、近い将来、このコンテストで発掘されたデザイナーが、世界的に活躍する姿を目にすることができるようになると確信している。

また、過去の受賞者の中から県内のアパレル企業に就職する者も現れ、徐々にではあるが、その成果が表れてきている。

なお、第九回大会は、来る十一月二十九日に長良川国際会議場（岐阜市）において開催される。今回のテーマは「VIVID（ビビッド）」で、感性豊かな独創性あふれる作品が多数集まることが期待される。

今回の大会は、これまでの実績をもとに、さらにスケールアップとレベルアップを図り、岐阜のファッション産業のさらなる活性化につながるコンテストにしたいと考えている。

社会全体が経済環境などの変化により成熟する中で、人びとの生活は物から心へ、さらに情緒性豊かな個性あるライフスタイルの創造へと向けられており、これに対応していくためには、アパレル産業においても、製品の付加価値化が必要不可欠である。

そのために、県においても、世界に向けて情報発信する「世界のファッション工房GIFU」を目指し、ものづくり、人づくり、まちづくり、ブランドづくりの四本柱で、産・学・官が一体となって、岐阜を「真の総合アパレル産地」とするための施策を積極的に展開していきたいと考えている。



シックをテーマにした昨年のファッションコンテスト

浜ちりめん復活へ和装イベント 園遊会に毎年千人を超える参加

長浜市は、琵琶湖の東北部、湖北地域の中核都市で人口約六万人のまちである。長浜のまちは、四百数十十年前から市街地を形成しており、豊臣秀吉公が初めて城持ち大名となり、商人町としてその基盤を整えた。その当時培われた町衆の進取の気性や伝統を守り文化を尊ぶ心意気は、今なお長浜のイベントやまちづくりの中において、その根幹となっている。

長浜市が和装のまちとして全国にその名を発信させているのは、昔から繊維産業が盛んな町であったからである。もともとこの長浜を中心に湖北地域は、絹織物の産地であった。湖や山、川に囲まれ織物機業に最適の湿度があり、また近畿、東海、北陸の要路にあるなど立地条件が恵まれていたことが挙げられる。

59年からきもの大園遊会

こうして繊維産業（浜ちりめん）は長浜市の地場産業として栄えてきたが、生活様式の変化や市場の構造変化に伴い、繊維業界は景気が沈滞していった。時を同じくして、昭和五十八年に長浜城が約四百年ぶりに再興

されたのを機に「長浜出世まつり」が始まった。折しもその当時はロードサイドに大型店が次々に進出し、市街地商店街の衰退が一段と加速した時期であった。

このため、翌五十九年の出世まつりは、地場産業の振興と商店街の活性化、観光客の誘致といった課題を視野に入れ検討が進められた。

その中から生まれたのが、着物を着た若い女性に、市街地一帯を散策してもらおうという「きもの大園遊会」である。

この「きもの大園遊会」は、十八歳以上の未婚女性を対象にしており、長浜城近くで受け付けのあと、何コースかに分かれて市街地一帯に向けて散策してもらうという内容である。

今ではすっかり定着したイベントであるが、初回の五十九年当時は、「募集定員までの参加者が果たしてあるのだろうか」と不安の声が大きかった。さらに「一きもの以上もの距離

離を女性が歩いてくれるだろうか」「歩くのがいやな人のためにバスを用意しよう、いや乗り降りが難しいのでは……」、議論は白熱した。このイベントの運営



服部泰治
長浜市商工観光課

母体は業界、商工会議所、行政、市民の方で構成する実行委員会であるが、大学や短大でチラシを配布したり、知り合いの女性にくまなく声をかけるなど、さま

さまざまなところへ行って、参加者の確保に努めていた。結果、当初予定の五百人を上回る六百人の参加があり、まち中を華やかに彩った。

「ハレ」の場提供が人気の原因

その後、回を重ねるごとに規模を拡大し、平成七年ごろからは、受け付け初日だけで募集定員を上回る申し込みがあるほどの人気を博した。昨年は、天候の影響も重なって千百人余りの参加と、最近では若干参加者が減少しているものの、京都、大阪など県外からの参加もあり、今日でも日本一と誇れる長浜の秋を彩る一大着物イベントとして定着している。その要因として豪華商品が当たる抽選

会も魅力の一つであるが、着物を着る機会が少ないなか、公に着物を着る場、「ハレ」の場を求める潜在的需要も人気の大きな要因となった。

長浜での和装イベントは、このきもの園遊会のはかに、未婚者だけでなく既婚女性、さらに男性も参加できるようにとの要望に応え、「長浜着物の集い」を平成九年より開催。また夏には商店街の夜市に併せて「七夕ゆかたまつり」を行い、その日は業界や金融機関の窓口、市職員もゆかたを着用して職務に当たっている。さらに十二年度には「きものdeかっぱ」と題して、一風変わった着物姿の人たちを募り、コンテストを行い、新たな着物需要をおこし、産業化を図る試みも行っている。

これらのイベントの運営には積極的に若者に企画段階から参加してもらい、イベントを



七夕ゆかたまつり



きものdeかっぱ

通じてまちづくりに取り組んでもらっている。

きものサミットを開催

さらには平成十一年度には、それまで京都で行われていた「きものサミット」を長浜で開催し、まちづくりとのかかわりのなかでの和装振興のあり方について議論し、従来とは異なった角度から今後の方向性などについて全国に発信した。

長浜での和装振興はただその分野だけで考えるのではなく、街の活性化、いわゆるまちづくりと結び付けることで相乗効果を生み出すような取り組みを行っている。そのような中で、関係業界、行政、商工会議所などが連携して地場産業を振興させるため、十年七月には「長浜地場繊維産業振興協議会」を設立し、着物着用機会づくり事業の実施や、全国のきものイベントへのPRの推進など、二十一世紀の新たな地場繊維産業の展開を図っている。

きもの大園遊会をはじめとした各種イベントは、まちづくりという観点も踏まえた市民の知恵で発案されたものである。とくに、このようなイベントに参加された多くの方は、和の文化への共感者であり、同時に長浜のまちづくりの参加者であり、主体者である。そういう意味から、参加された方から多くのことを学びあうことで、新しいまちづくりのテーマを創り出していこうと考えている。

街道を歩く

小倉は、本州と九州を結ぶ交通の結節点で「九州の咽喉」(菱屋平七)と言われている。ここにある「常磐橋」を起点に、門司往還、唐津街道、長崎街道、香春・秋月街道、中津街道の五つの街道が放射状に広がっている。

私 は、昨年二月から「唐津街道を歩く会」主催の催しに参加したのをきっかけに、ほかの四つの街道を一人で歩き、本年五月までに合計四十日間をかけて、五つの街道のすべて、総距離約五百キロを踏破した。

街道歩きの魅力は、語り尽くせない。健康によい。ストレス解消になる。地理、歴史、文化、生物、風俗・習慣などを知ることができ、毎回、新たな発見や驚きの連続である。

長崎街道は、歴史上の人物のほか、ラクダや象も歩いている。そんなことを想像しながら歩くのも楽しい。人影のない長崎街道冷水峠や、香春・秋月街道旧八丁越の、緑深い昔

ながらの静かな石畳を一人歩いていると、ふと、昔の旅人が現れそうな錯覚すら覚える。

道中には、道標や石仏がある。香春・秋月街道沿い山田市大谷口の国境石「西筑前國」「東豊前國」は、今の「筑豊地区」が筑前と豊前とに分かれていたことを教えてくれる。

石仏は、道案内にもなり、疲れもいやしてくれる。福岡県内には猿田彦、佐賀県内は恵比寿像と地方によって信仰の対象が違うのが面白い。

神社は、旅人にとってもまさに「鎮守の森」だ。真夏に、長崎街道最大の難所冷水峠を越え、体力気力ともに消耗し切って筑紫神社にたどり着いたとき、そのことを実感した。

宿は、防衛上の配慮からかぎ型状の道が多いが、今日では、それが期せずして通過交通を抑制する安全な生活道路となっている。黒崎宿には非常用の避難路であったという。

長崎県大村から諫早に向かう鈴田峠では、すっかり道を間違えてしまった。後日諫早側からのほうが迷わないと聞き、目印のパン屑ならぬ割り箸を刺しながら逆にたどる自称

「ヘンゼルとグレーテル作戦」を成功させた。香春・秋月街道の猪膝で知り合った犬は、何を思ったか雨の中、大隈まで約七キロの道をびったり寄り添い供をしてくれた。

私 が心がけているのは、公私の峻別だ。行動は、一人、スケジュールは、自分でインターネットを用いて立てる。前回歩いたところまで電車やバスで行って、目標地点まで歩き、また、公共交通機関で帰るという繰り返しだ。

誤解のないように言っておくが、私も決して仕事は暇ではない。しかし、一旦仕事を離れば、趣味に打ち込むのが私の流儀だ。

とはいえ、街道歩きの成果は、仕事に応用できる利点もある。たとえば過疎バスの維持を訴える町長さんに、「私も乗りましたが、乗客は、私一人でした」と言う話が早い。

歩き終わると疲労感の中ですぐに次回が待たれるのは、歩き続けると脳内ホルミネの分泌で「ウォーキングハイ」という爽快な気分になるからだそう。目下の私の悩みは、次に歩くべき街道が見つからないことである。



長澤純一 (福岡県副知事)



©砂浜美術館



入賞作品のミュージアムグッズ(Tシャツプリント用)



Tシャツアート展＝高知県大方町

砂浜美術館では、長さ4mの砂浜が美術館であるというコンセプトのもと、公募したイラスト・写真をプリントしたTシャツを並べる「Tシャツアート展」を89年から実施している。展示後はそのTシャツは応募者に届く

グッドデザイン選定北海道

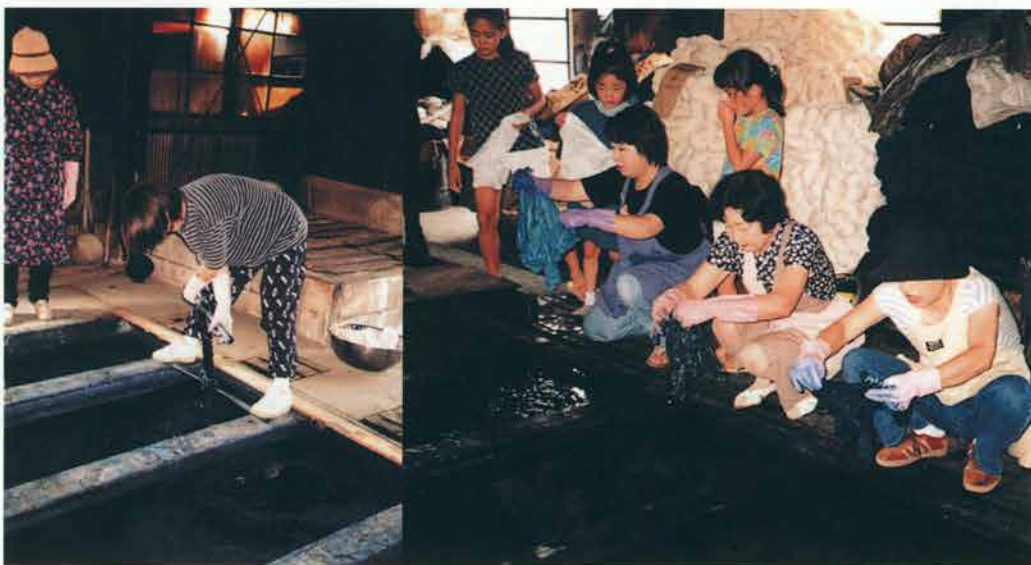
北海道は、企業のデザイン力の強化と魅力ある商品づくりを目指し「グッドデザイン製品・施設」を選定。機能性、ファッション性に配慮した介護を受けている人向けパンツおよび冬のフィールドを楽しめる雪上歩行靴



平成12年度選定商品(左上)フリーカット畳(左下)木製床材

藍染め茨城県真壁町

「ジャパンブルー」と呼ばれ珍重されてきた藍だが、化学染料に取って代わられた。真壁町では藍染めの復活と保存、それによるまちづくりを狙いに、工房を一般開放しており、体験コーナーの場の提供を検討中だ



下駄マラソン福島県西会津町

桐下駄の産地である西会津町では、「桐ゲタ健康マラソン大会」が行われる。必ず桐下駄をはいて走ること、下駄が割れたら補給所までの間に限り片足だけはだして走ってもよい、などが条件。距離は6.4kmで、小学生から壮年まで七部門



はかた伝統工芸広場 福岡市博多

博多の魅力づくりの一環として、「はかた伝統工芸広場」が開かれる。博多織の手織り実演などに加え、昨年は博多帯を締めて踊る着物バラバラも登場。唐人町の七夕まつりは浴衣を着て参加してもらい商店街を盛り上げる



伝統の再織体験 和歌山県高野口町

高野口町は、全国の九〇%を占めるバイル織物（別名シールメリヤス）のまち。活性化を図るため行っている、バイル織物から出るはぎれを組み合わせる油絵のような布に仕上げるバイルカラージュヤ、再織などの体験教室が好評



うらわんぐランプリ 香川県丸亀市

日本の団扇生産の九割を占めるのが丸亀市。丸亀城における「うらわんぐランプリ」では、背中に二回りほどの大団扇と重石のはいったリュックを担いで六十秒走の時間を競うゲームなどが行われる





扇まつり＝京都市

京都の伝統工芸である扇と団扇。その良さを再発見してもらおうと、京都扇子団扇商工協同組合青年部は6月「京都・扇まつり」を初めて開催。木枕（桐箱）の上の蝶の形的をめがけ扇を投げる「投扇興」や舞妓の舞のほか、「扇供養」では段ボール4箱分の使い古した扇が火にくべられた



きもの園遊会と大茶会＝佐賀県嬉野町

嬉野は温泉の町かつ、お茶の産地。仲居さんなどの制服である着物とお茶を結び付け、うれしのほほん着物園遊会「和（なごやか）」大茶会を開く。「着物の似合うコンテスト」などイベントが盛りだくさん

文化 発信

二つの例 伊藤白潮 俳人



column

中新田町——といっても知る人はほとんどあるまい。なかにいだと読む。宮城県古川市の近くで、一面水田が広がる穀倉地帯である。

その町で、六月二十三・二十四日と「詩の噴火祭」というイベントがあつて、私も招かれて出かけてきた。

第一日は、中新田賞といって、詩集、句集などを対象に全国的視野に立って、金子兜太、宗左近、中原道夫その他の俳人、詩人たちが選考して賞を与える式があつた。

町の図書館のホールで、選考委員、受賞者を中心に関係者が集まつたが、その数は意外と少ない。

今年は俳句の部では熊本のあざ蓉子（花組代表）、水野真由美（吟遊所属）などの句集が受賞、やはり一風変わった印象だった。

二日目は自作の詩や俳句の朗読で、会場はバッハホールという音楽効果を考えた広さ、私も三句とスピーチを三分間だけ行った。

午後は募集してあつた俳句の公開選考会と

いった珍しい形式、正反対の討論などなかなか面白い。当日句の入選者にはお米が賞品に出る一幕もあつた。

このイベント自体、宗左近の発案でもう十年近く続いていて、町という公共団体が後押しして、ようやく全国的に俳壇などに知られるようになった。

船橋市——私が住む千葉県内では二番目に人口の多いまちだが、ここに船橋市文学賞というのがあり、今年で十三年目になる。

私の俳誌「鳴」の元編集長が市会議員で、ギャングルのまちの汚名を返上しようと、議会に提案して設定されたもの。

小説、児童文学、詩、短歌、俳句の五部門で、一般市民から作品を募集、選考し受賞するもの。

選考委員には市在住、または関係の深い一流の人たちがなり、賞金も出て作品集も出す。俳句に限れば、先ごろ亡くなった能村登四郎などで、私も一枚加わっている。

はじめはかなりの応募があつたが、このこ

ろは減り気味でもう一つ効果があらならない傾向である。どうしても市単位の応募では、質が落ちざるを得ないところか。

それでも小説など、過去の受賞者で新人として活躍している人が出てきているという。

俳句でいえば、市内には結社の同人などで多くの俳人がいるのだが、こうした賞には応募してこないうらみもある。

中新田と船橋、探せばもつとあるだろうが、こうした文化の発信基地から、全国へ向けてもつとめと熔岩流のように広がってほしいと願う。まち当局といわず、民間の心ある人などもこうしたことに大いに協力してほしいものだ。何よりも美しいものを美しく表現する文化を、この荒れた世に育ててほしい。

お隣の市川市には、芸術文化団体が一つにまとめられてあるが、今度、市民から市に寄贈された民家の一つに事務所を置くことになった。

市民が気楽に文化活動ができる一つの拠点になれば素晴らしいではないか。

石見銀山の風土に根ざすモノづくり 地方から暮らしを提案



松場登美
株式会社石見銀山生活文化研究所
代表取締役所長

縁あって夫（松場大吉）有限会社松田屋社長）の郷里、石見銀山のふもとにある島根県大田市大森町に暮らし始めて二十一年になる。閉山後は過疎の一途をたどり、二十年前といえはその長い歴史の中でもどん底の時代だった。全戸の五分の一を空き家が占め、廃墟と化したまち並みが山の谷間に残されていた。

自分の欲しいものを作る

夫の実家は代々地元で呉服を商っていたが、斜陽の時代を迎え、塩、たばこなども取り扱いながら営業している状況だった。生計を立てるために、私は子育てをしながら台所でコッコツと好きでためた端切れをはぎ合わせて小物を作り、夫はそれを行商して歩いた。食べるだけがやっとながたが、私は作ることに夢中だった。この役割分担のちに生活雑貨全般、ファッションなどの企画・開発担当の（株）石見銀山生活文化研究所と製造販売担当の（有）松田屋となり、それぞれが各会社の代表となった。

私は専門的な技術やデザインの習得、勉強

をしたことがない。次女を出産するまで針を持ったこともなしの、すべて自己流であった。ある時期、このことで自信をなくしたり、不安になったこともあったが、今ではこれがプラスになったと思えるようになった。業界の常識にとらわれることなく、自由な発想でものづくりができたからだ。また、流行のものを見る機会もないこの土地で暮らしているうち、むしろ何もなかったことがオリジナリティにつながることに気づいた。

世の中は情報時代としきりに言うが、必要な情報は自分のアンテナさえ磨いておけば自然に入ってくるものだ。今、何が売れているかという情報より、何が必要とされているかという時代性を先取りする感性のほうが重要だと思う。自分が生産者であり、同時に消費者であることに気づき、自分の欲しいものを作ればよいのである。この点で、自分は一番消費者に近いデザイナーであると自負している。

また、デザインというものは、単に形や色を考えるのではなく、暮らし方、さらには生き方そのものを描くべきだと思う。私にと

って石見銀山は、その生き方を表現する最適の舞台である。

伝 建地区指定でまちに誇り

帰郷してから数年後、長い間時代にとり残されていたこの町に時代の風が吹きはじめた。古いまち並みが見直され、国の伝統的建造物群保存地区いわゆる伝建地区に指定された。規制の網をかけられることに対して一部の人の間には抵抗もあったようだが、どん底まで生きていた町はわらをもつかむ思いで、それにかけた。急に観光客が増えたり、経済的に潤ったわけではないが、町民の意識の中に「誇り」が芽ばえはじめた。このことは、日々の暮らしの中でも変化が生まれた。家を修理する際心配りしたり、縁側に花を飾ったり、自動販売機を撤去したりするなどの試みがみられ、さらには古い民家でコンサートを開催したり、展覧会を開いたりして、町を楽しむようになってきた。

十三年前、自宅前の古い空き家を買収求め店をつくった。伝建地区の指定を受けたとはいえ、まち並みはいまだ閑散としていた。こ

の町に店をつくることにだれもが反対した。せめて出雲にとか、せめて松江あたりとか、という声が大勢を占めた。しかし夫は、石見銀山こそ全国に通用する地域であって、これを生かしてこそ自分たちの生き方があるのだと頑として譲らなかった。

夫がだれよりも石見銀山を愛していることを知っていた。だからこそ、十数年前から当社の製品には「私たちは石見銀山を愛し、この地に根を下ろしたもののづくりをしたいと考えています」というコピーの札を下げている。

買い求めた家の敷地は三百坪。資金がないので、毎年一カ所ずつ改装を続けている。その間、私たち夫婦の合言葉は「常に未完成でいよう」である。完成したら終わりだ。地域活性化の名のもとに、何億円という費用をかけて、周辺の市町村にハコ物が建てられるのを横目に、必要なときに必要なものだけをつくることを実行してきた。

地元の人との交流の場となるのが、広島県から移築したかやぶきの家「鄙舎」と文明を排除した家「群言堂」だ。「群言堂」は、当時わが家にホームステイしていた中国人の姚さんが命名してくれた。群言堂とはたくさんの人それぞれが好きのことを言いがらも影響し合って、一つの良い流れ、方向性をつくっていくという考え方を表現した言葉だそう。それに相反する言葉が「一言堂」で、権

力者のいわゆる鶴の一声で動かされる世界だそう。

そして現在、江戸時代の地役人の屋敷跡を改装中である。仮の呼び名を「田舎の贅沢家」とつけている。私がこれまで提案してきた衣食住の文化をトータルで表現、体験していただくため提供するものであり、私が最終的に目指すライフスタイル産業を実現する場したいと思っています。

石 見文化を商品化

二十年前、夫婦二人だけでスタートしたが、毎年、夢を形にしているうちにスタッフも五十人ほどに増え、年商十三億円（編集部注）現在、東京、京都などの直営店や百貨店のインショップで全国展開）まで成長したが、決して拡大志向ではない。むしろ今後は縮小し、地域文化を大切にしながら豊かで楽しい暮らしをみんなとこの地で実現し、発信したい。それぞれの土地にはその土地の力が潜んでいる。「地霊」と呼ばれているものだが、私はその力を信じている。そして今、石見の素材を使った商品群「石見の精霊」を開発中である。

それとともに、これからの十年は、空間をつくり景観を守り、この町が取り戻した「誇り」とともに、次世代へ何かを伝えていきたいと思っている。大きな課題である。

かやぶきの鄙舎で行われる恒例のひなまつり



高齢者が支える伝統の紬織 行政・問屋・生産者一体で販路拡大



平良博一

久米島紬事業協同組合参事

久米島は沖縄本島から西へ約百^{キロ}の位置にある孤島。那覇から飛行機でわずか三十分、高速船で二時間弱ほどの距離にあり、周囲四十七^{キロ}、人口一万人弱の小さな島である。かつては、琉球王国と中国貿易の寄港地として栄えたと伝えられている。

この島は、東側に仲里村、西側に具志川村という二つの村から成っている。仲里村の小さな集落には多くの赤瓦家がそのまま残されている。どの家もその周囲を防風林の役目を果たす福木があり、肉厚の葉が艶やかに光る。

主役は65歳以上のおばーちゃん

風光明媚なこの島も少子高齢化が進み、人口に占める六十五歳以上の割合が二十数パーセントにも達している。この六十五歳以上の元気な女性たちが生産している伝統織物工芸品が「久米島紬」である。

この久米島紬の起源は、十五世紀ごろ、沖縄が琉球国と呼ばれ中国を中心に貿易を始めたころ、久米島の堂之比屋という人物が中国から養蚕の技術を学び、これを広めたことからじまっったと言われている。その後十七世

紀に入り養蚕・製糸の技術がもたらされ、さらに染色や織りの技法が確立、今の基礎がつくられ、その後、技術的に従来にない飛躍的な進歩をとげたといわれている。

伝統にこだわる

紬は、蚕の繭から糸を取り出し、よりをかけて丈夫な糸に仕上げて織った絹織物のことで、沖縄本島に数ある織物の中でも絹織物は首里を除けば久米島だけで織られていたといわれる。糸紡ぎから織りまでのすべての工程を一人の織り子がやるというのが久米島紬の特徴である。図案を考えて整経するのに約一カ月、染めに約一カ月、織って仕上げるまでにさらに数カ月要するので、染めから織りまで最低半年はかかることになる。しかも、染料はすべて天然染料を用いた草木染めが基本であり、科学染料は一切使用されていない。

そのような染料を用いた「泥染め」に大きな特徴がある。泥染めは百回にものぼる染色により、深みのある独特な茶色に染まる。紬部分の色系にはクルボーやヤマモモなどの黄色系の植物染料が使われる。染めるたびに色合

いは微妙に違い、まったく同じものはない。それは、伝統にこだわる姿勢を一貫して貫いているからで、それがまた本来の手づくり感を一層高めているゆえんでもある。

久米島の産業は、農業（サトウキビ）、漁業（車エビ・もずく）そして観光産業に大別される。農業においては高齢化の波に押されて年々生産高が減少している。こうした中であって、伝統工芸品である「久米島紬」の生産の多くは、今も元気なおばーちゃんたちによって支えられている。

仲里村の紬生産は、農業と共存を図りながら、農家がそれぞれ織機を一台置いて、染色から製織まで一貫生産を行い、生産者がまとまって共同組合事業を興した点が生産の順調な伸びにつながったといわれている。一九七七年には、久米島紬が県指定無形文化財に指定された。また「久米島紬ユイマール館」ができ、さらに展示資料館もオープンし注目を集めている。

以前からの課題であった国指定の無形文化財への格上げ実現に向けても、平成十二年か



応募者がつねに募集を上回るなど、後継者育成は順調

後継者育成も順調

ら養蚕事業に取り組み、苗の植え付けおよび管理を実施しており、併せて養蚕施設の設置についても取り組む計画である。ここでも、島のおばーちゃんたちが受け継いできた糸紡ぎや養蚕の技術が生かされることになるだろう。

バブル崩壊後、久米島紬も全国的な着

物離れの影響で、存亡の危機に直面した時期があった。しかし、その後、国、県、とくに村の「紬おこし」の支援のもと、産地基盤整備事業が進み各施設とも充実した。また、全国の産地の中でも珍しく後継者の応募に受ける申し込みが順調。現在、行政の補助を受け、後継者の確保と技術・技法の伝承を目的に後継者育成事業が行われ、毎年、五人の募集に対して十数人の応募があり、選考に苦勞するほど。今年は、実費負担での参加者が出るような状況で、今後、今以上の人数を受け入れられる環境を構築する必要がある。

催事で紬おこし

久米島では、久米島紬産地活性化を図るため、全国から多数の呉服問屋および系列の小売店関係者を招待し、久米島紬展示販売会を開催している。平成九年から始まり今年で五回目となった。

毎年十一月に開催されるこの販売会は、伝統的な泥染め製品のほか、新しくデザインした製品を含め、産地の意気込みが感じられるもので、行政、問屋、系列小売店および生産者間の信頼関係の増進と連携を強化するほか、さらなる販路の拡大が図られている。

催事の内容は、展示販売会のほか行政、問屋、生産者の三者交流、産地視察など。とくに、交流会では織り子のほとんどが自ら織った反物を仕立てた着物を着て参加しており、自分の作品に対する自信と愛着が感じられる。そして、積極的に関係者と意見交換をする姿が見られ、その熱心さにも感心させられる。

このほか、紬の講演会も毎年、夏に開催している。他産地の工芸士や本土の有名な呉服小売店の経営者を招いての講演会には、暑い中、たくさんのおばーちゃんたちが参加する。熱心に聞き、多くの質問が出る様子を見た講演者は、おばーちゃんたちの物づくりに対する貪欲さに驚くほどである。

久米島の北のほうに、比屋定という集落があり、そこで長年、紬の生産に従事している

紬織は高齢者の生きがいでもある



神里さんを訪ねてみると、真綿から糸紡ぎの最中であつた。今は、織りはやっていないものの以前は、糸づくりから織りまで一貫してやっていたそうだ。ゆつくり糸を紡ぎながら、たまに行くゲートボールやグランドゴルフが楽しみだそうである。

島の歴史の中で、手から手へ受け継がれて

きた技を守り、丹念な手仕事を支える織り子の手から生まれた紬は、ぜいたくなほど時間をかけられただけに、時を生きる光沢を放っている。

今後、久米島紬のさらなる活性化を目指した諸事業を、織り子、組合、行政、問屋と一体となって展開していきたいと考えている。

地域——施策の推進

電子自治体推進 パイロット事業

政府においては地方公共団体の電子化推進が政府における最重要課題の一つであること
をふまえ、住民の皆さんが二十四時間、どこ
からでも地方公共団体に対して行政手続きで
きるよう、申請・届け出など手続きのオンラ
イン化を推進している。

このため、各省庁においては個別手続きご
とに実施方策提示の時期などをとりまとめた
アクション・プランを本年度早期に策定する
とともに、年度内には必要な法令の見直しを
行うなど制度面の検討を進めているところで
あるが、総務省自治行政局地域情報政策室で
はこのような制度面の検討と合わせて、「電子
自治体推進パイロット事業」として複数の申
請・届け出など手続きに利用可能な汎用電子
申請受付システムなどのモデルシステムを構築
し、実証実験の結果をふまえた標準仕様など
を各地方公共団体に提示することとしている。

その際、広域的なシステム整備を推進する
観点から、この事業に参加いただく市町村が
共同で利用できるシステム（ASP方式など）
として構築することとしており、平成十三年
度はこの共同システムを構築し、総合行政ネ
ットワーク（LGWAN）に接続することに
より、参加市町村に実際に使っていただく実
証実験を実施する（左図参照）。

統合型の地理情報システム （GIS）の推進

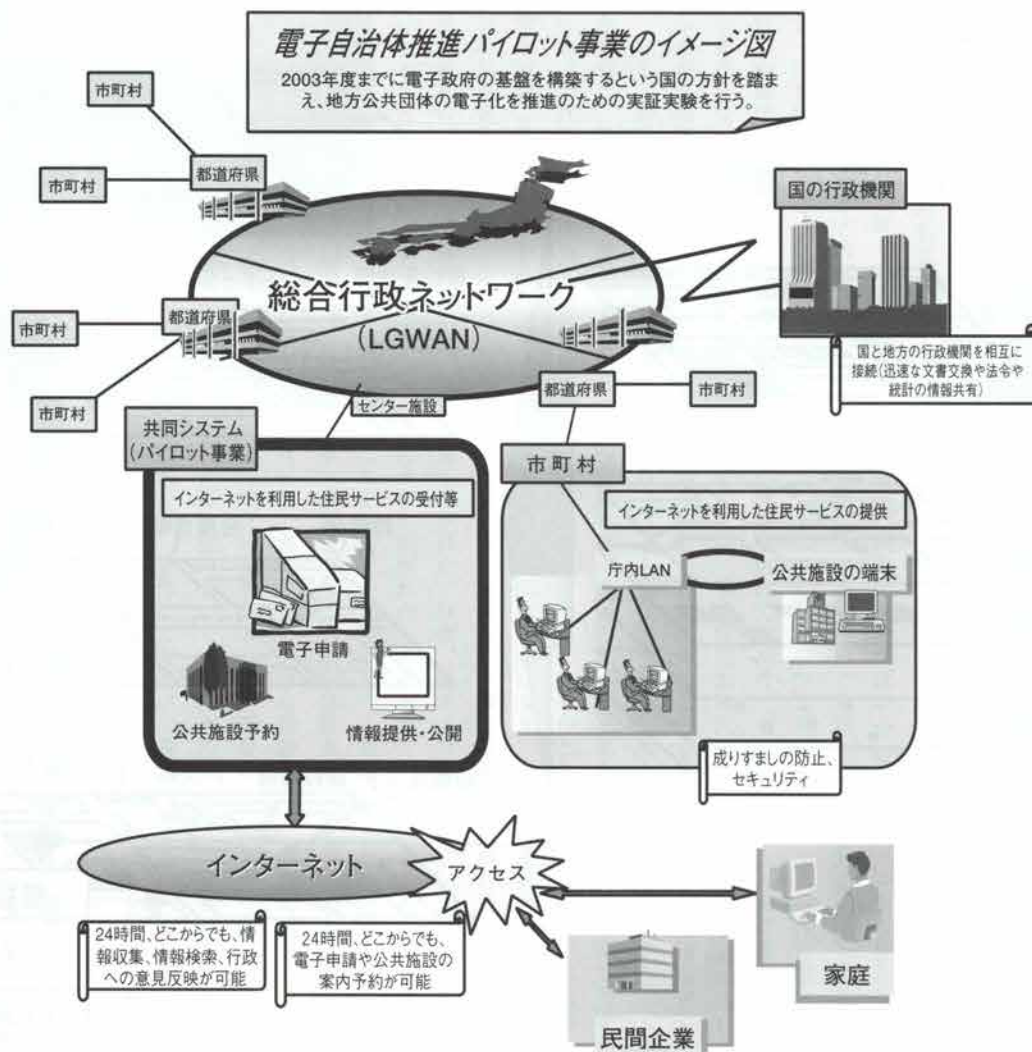
総務省自治行政局地域情報政策室では、平
成十三年七月十二日に統合型の地理情報シス
テム（以下、「統合型GIS」）に関する指針
を策定した。この指針の主な内容は次のとお
りである。

1 地理情報システム（GIS）とは

・ 地域情報、統計情報、設備台帳を地図情報

GIS = Geographic Information System





と関連付けて管理し、加工・分析、表示するソフトウェア(道具)。

2 統合型GISとは

・地方公共団体が利用する地図データのうち、複数の部局が利用するデータ(たとえば道路、街区、建物、河川など)を各部局が共用できる形で整備し、利用していく市内横断的なシステム。

・統合型GISを導入することにより、データの重複整備を防ぎ、各部署の情報交換を迅速にし、行政の効率化と住民サービスの向上を図ることができる。

3 統合型GISのメリット

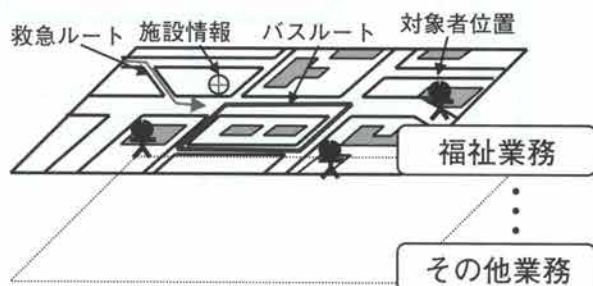
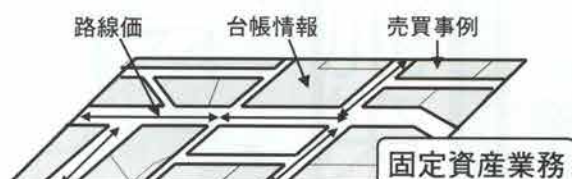
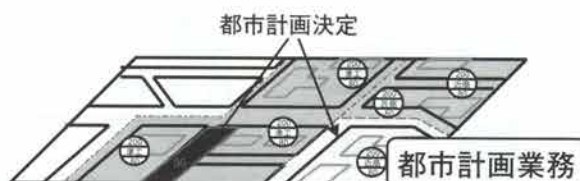
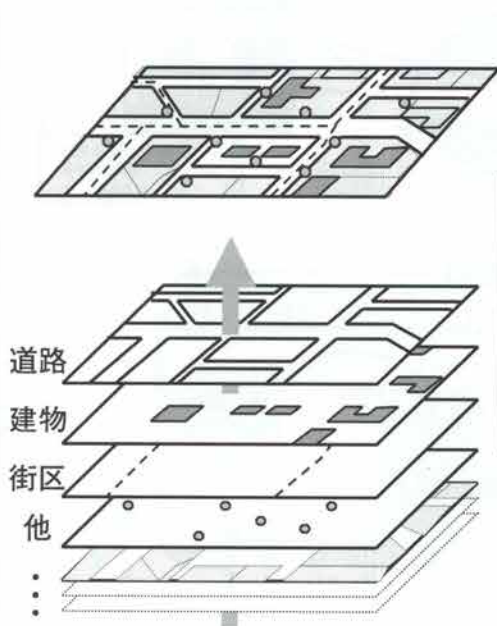
① 市内における業務の効率化

・行政の持つ情報のほとんどが地理的な位置(場所)と対応づけることができる空間データであり、情報を全庁横断的に地図情報の上に表現することで、多様なニーズに応じた総合的な行政サービスを実現できるとともに、住民に対して視覚的に分かりやすい情報提供を行うことができる。

・地図情報は、拡大、縮小が自在にでき、これまで業務ごとに整備してきた紙地図を統合し、コストを低減することが可能になる。

・地域に関する行政の多く、たとえば福祉、環境、防災といった業務は場所に関係する情

共用可能な地図データ



報を扱うものであり、統合型GISを適用することで業務の改善が期待できる。

- ・地域に関する行政課題や解決策の検討に際し、複数の代替案の効果・影響の比較考量や、複数分野にまたがる総合的な課題の評価が視覚的に表現され、首長などへの判断材料の提供が容易になる。
- ・行政評価の経過や結果を住民へ分かりやすく提供することで、行政の透明性が向上し、施策への理解が深まる。

② 住民向けサービス向上への活用

- ・暮らしの便利帳などの情報をホームページ上で提供する場合、統合型GISを利用することで、視覚的に分かりやすい情報提供ができる。
- ・申請・届け出に必要な地図を統合的GISの情報から提供することにより、住民の利便性が高まると同時に事務の効率化が可能となる。
- ・行政から住民への情報提供だけではなく、住民から行政への意見や要望を共用空間データを用いて表現することで、正確な情報の伝達が可能となる。
- ・さらに地域コミュニティ活動の中においても地図情報を積極的に活用することで、互いの情報交換の手段として活用できる。

美方町は連日てんてこ舞い



宮脇寿一 兵庫県美方ツチノコ探検隊事務局長

美方町は兵庫県の北部に位置し、県下一人口の少ない町である。兵庫の屋根と言われる水ノ仙を南東に仰ぎ、広葉樹、針葉樹、さらには高原野菜や棚田米、これらの豊かな自然の恵みを受けながら、全国でもっとも有名な但馬牛の産地でもある。

近年、異常気象や異変で自然環境が変化し、降雨量や降雪量が不安定な中、今月の一月には小規模群発地震まで起こり、幻と言われたツチノコが目覚めたのか、とうとう今世紀最初に、美方町で捕獲された。



もともと私たちは、土の子と称して地元の子供たちを軸に、都市と農村との交流を昭和五十四年より

後、大阪忠岡町などと土の子交流は輪を広げ、民間同士の交流から、民間と行政、さらには行政と行政へと発展し、土の子が取り持つまちづくりへと裾野を広げていった。その最中の平成元年、美方町実山地区にツチノコの死骸を以前埋めたという人が現れ、二十世紀最後の大発見?と胸を躍らせ、世紀の大発掘を試みた。午後四時だというのにそのときに限り、辺り一面真っ暗になり、大風と大雨で掘り起こした土砂は跡形もなく流された。以来、ツチノコのあたりかと騒がれたものである。これを契機に、「美方ツチノコ探検隊」が発足した。しかも懸賞土地百坪付きである。ツチノコを捕獲して別荘地百坪をゲットし、自然豊かな美方町に住みついていただきたいの思いで、こうしてツチノコ探検隊員は十三年間頑張ってきた。

六月六日の暑い日、工事現場近く

でツチノコ捕獲、の第一報が届いた。この日以

来、マスコミ、各地からのツチノコファンが大挙して押し寄せ、この一カ月間に四千人近くが来町した。ツチノコ一匹で数十社のマスコミ、数千人の来町者があり、美方ツチノコ探検隊事務局は連日てんてこ舞い。スタッフは車屋さん、電気屋さん、公務員、フリーター、何でもありで、連日、手弁当で当直に当たる。えさ係、説明係、準備係と数日間のうちにそれぞれの役割分担が決まり、町民からは頑張れの声。その反対の意見。いつの時代も結果を恐れず、ただひた走る、後で結果がついてくる。この面白さに多くのスタッフが集まる。

今年の夏祭りには婦人会が総出でツチノコ音頭で練り歩く計画があり、連日連夜の練習が続く。地区の至る所で組み木、キーホルダー、まんじゅう、シール、ステッカー、ネームプレートなどの土産物の見本が

届く。議会からはツチノコ基金をせかされる、といった騒ぎで、さっそうく美方ツチノコ基金を立ち上げると

同時に、十数万円が振り込まれた。八月二十五日と二十六日には第十三回美方ツチノコ探検が予定されており、ツチノコの正体が明かされる日となるだろう。そこで、今年のツチノコブームはたぶん、終息するだろうと冷めた目で見える人は多いが、スタッフたちはもう次のイベントを考え、まちづくりの準備に走り出している。

中には淘汰されたイベントもあるが、この町には一つのイベントを長く継続して行う傾向があり、多くのイベントは残っている。継続は力だよねどとうそぶきながら走っているうち、外からお客さんを迎えるもてなしの心を大切にしたいためか、とうとう隣町からボランティアスタッフまで現れた。

この小さな町の小さなツチノコがくれたプレゼントはお金には代えられないロマンを蘇らせてくれた。十年頑張ればまた、みんなに喜んでもらえるイベントが用意できると思っている。

六月六日、ツチノコ発見! ファン、マスコミが大挙して押しかけた

特別寄稿

坂梨義彦



電源開発株
新事業戦略室長

PFI、 官民共同で 責任を

日本初の金町浄水場事業を顧みて

公共事業の実行に民間の資金と技術を導入するPFI（プライベート・ファイナンス・イニシアチブ）手法が自治体を中心に積極的に試みられています。平成十一年九月に「民間資金等の活用による公共施設等の整備等の促進に関する法律」（PFI法）が施行され、すでにかなりの数にのぼるPFIプロジェクトが実施されています。

深刻化する財政事情とより良質の行政サービスを求める地域住民の声とに挟まれて、自治体のみなさんがこのPFIに期待されるところはますます大きくなっていると思われまふ。しかし現実これに取り組まれている自治体、そしてさらには企業の側双方で、実際にはまだまだ戸惑いが多いように見受けられます。

PFIの可能性と限界の両方を見据えながら、これをうまく活用していくための参考として、敢えて「ではない」風に論じてみたいと思います。

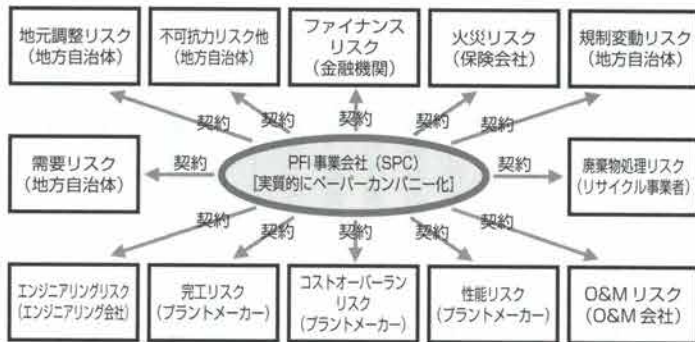
PFIは必ずしも 安くならない

まず、PFIとは「自治体の事業分野拡大のためのものではない」——PFIはあくまで在来の公共事業そのものを対象にした手法です。在来方式ではできなかった新分野の事業をPFIとすることによって自治体

でできるようなものではない、ということになります。誤解を恐れずに言えば、PFIでは「民間の発意」の尊重という

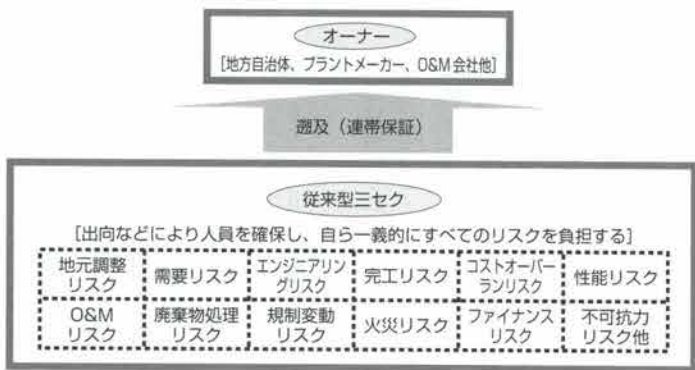
すべき公共事業がまずあってそれを「いかにうまくやるか」の発意というものであって、新たな事業そのものの発意ということではありま

次に、PFIとは「まるごと民間



①PFI方式の場合のリスクの扱い

②従来型方式の場合のリスクの扱い



にやらせることではない——PFIという言葉はイギリスからの輸入語ですが、本家のイギリスはもとより、PFIを導入している各国ではす

もしれませんが、ここで言う共同は出資の共同ではありません。責任の分担ということです。もし問題が起きたら、だれがどういう条件でその処理を引き受けるかを事前に契約で

ではPFIの代わりに「PPP（パブリック・プライベート・パートナーシップ）」という言葉を使っています。「官民共同」という語感です。官民共同だったら「三セク」方式がすでにあるのではないかと

縛り合っておくということです。したがって、「三セク」のPFIもあれば、百パーセント民間出資のPFIもある。理論的に言えば筆者は百パーセント行政出資の株式会社によるPFIもあり得ると考えています。敢えて論点を明確にするために申し上げたいのですが、「PFIは必



金町浄水場コジェネレーション施設

ず安くなるわけではない」と言ってしまうと、「何だ、高くなるPFIなんて言葉の矛盾じゃないか」と言われそうですが、高い、安いを言うには比較のベースを合わせておかないといけないということを言いたいわけです。従来方式の公共事業の場合、たとえば保険を掛けずに行わ

れる部分も多いかと思います。もしそのリスクが発現した場合はそこで新たに予算措置が取られて事業が修復されます。しかしPFI事業者の場合は後でだれかが予算をくれるわけではありません。あらかじめ保険料をPFI事業の料金に含めておかなければなりません。この保険の話に類するような事情がPFI事業の場合にはいろいろとあるわけです。したがってその部分については見掛け上はPFI事業のほうが従来型公共事業より高くなります。そのうえで本質的に自治体のコスト負担を低減させるのがPFIです。

事業の内容が勝負

わが国最初のPFI事業とされている「金町浄水場常用発電PFIモデル事業」はすでに昨年十月から操業を開始しています。この事業は東京都水道局の発案により、PFI法の施行に先駆けて先進的に試みられたものです。筆者が属する電源開発と石川島播磨重工業、清水建設がJVを組んで応募し、十一のグループ間での競争の結果、落札したものです。競争は金町浄水場が二十一年間に必要とするすべてのエネルギー（電気と蒸気）を最も効率的に調

達するアイデアを競うものでした。単にPFI事業者から買うエネルギーだけでなく、東京電力からの購入電気との組み合わせ方、浄水場の既設設備の転用などすべてのコストの合計での競争でした。プラントの設置という場合に普通に連想されるプラント代自体は入札価額全体の二割にも満たないものです。まさに「モノ売り」競争ではなく、二十一年間にわたる「事業」内容の競争であったわけです。PFI手法のだいご味が感じられるプロジェクトであると思います。

この単なる「モノ売り」ではないというところにPFI契約の難しさもありました。落札から事業契約の締結まで、当初一カ月のスケジュールであったものが、実際は三カ月かかりました。この間、都側と事業者側との正式な会議だけでも三十回に及んでいます。交渉の論点は複雑多岐にわたりましたが、一言でいえば、自治法体系とPFI事業関連諸契約、とくに銀行との融資契約を整合させるための苦勞でした。この工夫の一つの表れとして、都と銀行団との間で結ばれた「直接契約」があります。銀行による事業資産への担保権設定などについての取り決めがそ

の内容ですが、金を借りる立場でもない自治体がこういう契約を銀行と交わすというところに、PFI契約の特徴が表れています。

世界中で熱い期待

先日、上海で世界銀行主催による「都市環境開発国際会議」が開催され、「公共インフラ開発とPPP手法」と題するセッションでは、世界の各地で取り組まれているPPP（PFI）プロジェクトが紹介されました。会議では、世界中で増大する公共インフラサービス需要に応えるためにいかに膨大なコストがかかるかが認識され、より効率的に実行していくための試みとしてPFI手法への熱い期待が感じられました。PFIは多様な分野の人びとが知恵を出し合いながらつくり上げていく手法です。上海でも、行政体、メーカー、金融界、コンサルティングなどさまざまな分野から専門家が集まりました。

新たな時代の新たな公共インフラ整備手法を目指して官と民が同じテーブルを囲んで知恵と工夫を出し合っていくことで、新たな時代の新たな公共インフラサービスの整備が実現されていくものと思います。

PRIVATE FINAL

7月5、6日の2日間、福岡県八女市において「地域イベントおこし研修会」が開催された。この研修会は、毎年東京において開催し、今年で15回目を迎える地域イベント実務研修会のカリキュラム一式をバック化した「出前研修会」で、当センターの今年度の新規事業である。八女市における研修会はその記念すべき第1回目であり、地域イベント実務研修会の実践応用コースの講師でもある新藤健一郎氏(株地域戦略研究所所長)が講師を務めた。

研修会に先立つ七月四日、八女市商工観光課の伊藤芳浩係長と八女市観光案内ボランティアの馬場早智子さんの案内で、八女市および周辺地域の視察調査を行った。この事前調査は当事業において欠かせないもので、プロの目で地域を見ることににより、埋没している地域資源にスポットを当てていくことを目的とするとともに、講師が地域の実情を見ることでスムーズに研修会を進行させることを目的としている。

星野村のお茶の文化館、上陽町のほたると石橋の館、そして八女市の八女中央大茶園、岩戸山古墳など、半日かけて視察を行った。とくにお茶の文化館でいただいた「しずく茶」は絶品であった。

このしずく茶は、茶碗に玉露を四割程度入れ、体温程度にさましたお湯二十ccを注ぎ、二分ほど待った後ふたを取らずに少しずらししてしずく



グループワークによる研修

を飲むのであるが、重厚でふくよかな味わいが口の中に広がり、何とも言えない美味しさであった。また、しずく茶を飲んだ後の茶葉は、酢醬油をかけて食べることができ、ご飯のおかずになると思われるほど美味しかった。

視察後、レストラン、温泉施設などをまつりラクゼーション施設「べんがら村」において野田国義八女市長との意見交換会を行い、八女市には伝統工芸品や職人の技術など多くの地域資源があることを語り合い、盛り上がった。

研修会に23人参加

研修会初日、うだるような暑さの中、会場となった八女伝統工芸館には八女市の職員をはじめ、八女・筑後広域圏の自治体職員を中心に二十三人の参加者が集まった。野田市長、藤井健治地域活性化センター業務第一課長のあいさつに引き続き、講義に入った。

講義は、新藤講師が自ら各地で手掛けたコンサルティングの事例に基づき、およそ百二十枚のスライドを使った実践的なものであった。午後からは参加者を四グループに分けてグループワークを行った。

八女市で初の「出前研修会」 「梅りんさんまつり」など4企画を発表

このグループワークでは、八女・筑後広域圏における既存の地域資源を使って新たなイベントをつくり出す、という作業を行い、まずはグループごとに地域の課題や地域資源の洗い出しなどの作業に取り組んだ。各グループにおいては積極的な議論が行われ、熱気覚めやらぬ中、午後

八女・筑後広域観光開発研修会



四時半、一日目の研修は終了した。

八女まつりで意見交換

今回の研修会にはもう一つの目玉があった。それは八女のまつり関係者との「語ろう会」の開催である。八女のまつりとは、毎年秋分の日を含めた三・四日間開催され、今年で

二十四回目を迎える「あかりとちやっぱんぼん」のことである。ちなみに「ちやっぱんぼん」とは、八女地方で「燈籠人形」のことを指す幼児語である。

今回の語ろう会には実行委員長をはじめ、燈籠人形保存会、青年会議所、JA関係者など総勢二十六人の

参加者があり、新藤講師とまつりの企画運営上の問題点などについて意見交換することを目的に開催された。

簡単な講義に続き、実行委員長の乾杯により語ろう会はスタートした。参加者は新藤講師の話に熱心に耳を

傾け、会場のあちらこちらで活発な議論が展開された。結局、予定時間を一時間もオーバーした午後十時半に閉会した。しかし、まだ議論し足りないメンバーにより、午前二時まで場所を移しての語ろう会は続いたそうである。

研修会二日目はあいにくの雨とな

った。この日は前日に引き続き、グループごとにイベントの企画案づくりに取り組んだ。昼食をはさんで午後から模造紙への清書、そして各班による発表が行われた。

「箱雛伝説in八女」「船小屋」筑王まつり」「梅りんさんまつり」「スイートラブ」光と水のファンタジー」の四つのイベントが発表された。どの班の発表内容も開催時期、対象者、動員目標数など詳細に設定されており、すぐにでも実行に移せるような企画だった。中には、締め込み姿の男性によるトライアスロン大会を企画する班もあり、参加者の笑いを誘っていた。

出前研修会要望の声

各班の発表後、新藤講師より講評をいただき、二日間にわたる研修会は幕を閉じた。

今回の研修会は冒頭でもふれたように、出前方式としては初めての実施であったが、八女市商工観光課の方々の協力により無事終了することができた。参加者の評価も高く、アンケートによると講義・グループワークについて「参考になった」という意見がほとんどであった。このほかにも、「地域おこしのための一つ

の手法としてのイベントの重要性を再認識した」「自分の住む地域にはまだまだ埋もれた魅力があることに気付いた」「多面的な考え方を学べ、これから業務を進めていくうえで参考になった」などの意見があった。

また、野田市長は、「このたび、地域イベントおこし研修会の委託事業を有意義に開催することができた。地域おこし、まちおこしのためのイベントの位置付け、どうしたらイベントのマンネリ化を打破できるかなど、講師の新藤先生から事例を通してわかりやすく、そして明確にご教示いただき、方向性を見いだせた感があります。関係者の皆さまのご協力に深く感謝申し上げます」とコメント。

地方財政が厳しい折、地方から東京で開催する研修会に参加するのは年々難しくなっている。そのような状況の中で、今回のような出前研修会に対する潜在的なニーズは高いものと思われ、参加者からも「また同様な研修会を企画してほしい」との声がいくつかわ寄せられた。センターとしても今後積極的に当事業をPRして需要の掘り起こしを図ってきたい。

（助）地域活性化センター業務第一課
副参事 宮本明人

ニホンリスと人が 触れ合う里づくり 日本のセントラルパーク目指す

鳥取県のほぼ中央部に位置する倉吉市。古くから城下町として発展し、江戸から明治・大正期にかけては商業都市として繁栄した。今も残る白壁土蔵群や商家の町並みに、往時の面影をしのぶことができる。

その倉吉市のシンボル・打吹山うつぶきやまは、標高二百四十四メートル、都市の中にありながらも、全山がスダジイ（フナ科の常緑高木）などの原生林で覆われている珍しい山である。ふもとの打吹公園は、山陰随一のサクラとツツジの名所として有名であり、四季を通じて市民や観光客の憩いの場となっている。

「倉吉ニホンリスの会」は、ニホンリスが、公園を訪れる市民や観光客の手から餌をもらい、ベンチの横で遊びまわる、そんなリスと人が共生できる「ニホンリスの里」づくりを

目指している。

かつては北海道以外の日本各地に生息していたニホンリスも、今日では琵琶湖以西では「絶滅の恐れのある個体群」とされている。九州地方ではすでに絶滅したとの推測もあり、中国地方でもほとんど姿が見られなくなっている。

子供にも広がる活動の輪

きっかけは、当時の青年会議所や商工会青年部のメンバーたちが、打吹山にリスを放し、打吹公園をニューヨークのセントラルパークのようにできないか、と思い立ったこと。しかし、さっそく捕獲許可を取って山梨県内の山に捕獲に行ったものの、獲れたのはネズミばかりであった。そこで初めて、生半可なことではニホンリスの里はできないと実感



し、それ以後は、東京の井の頭自然文化園（公園）などの先進地を訪ね歩き、また各方面の専門家の協力を仰ぎながら、ニホンリスの生態や繁殖、飼育方法について研究を重ねていった。

「最初は単にかわいいからと思って取り組んだだけに、後の勉強は大変でした」と理事の里見さんは笑

いながら当時を振り返る。

平成四年、彼らの地道な努力が認められ、協力をお願いしていた研究者からニホンリスのつがい譲り受けることができた。同年三月、市民から広く会員を募集して「倉吉ニホンリスの会」を発足させ、同年八月には、市民からの寄付金で打吹公園内に鉄骨二階建てのリス舎（繁殖棟）も完成した。

最初に倉吉に來たつがいは、翌五年には五月と九月に各四匹、計八匹の子リスを誕生させた。これには「ネズミ算ならぬリス算」と会員一同大喜びした。しかし、その後はなかなか思惑どおりにはいかず、繁殖ペースはゆっくりで、現在でも三十匹弱にとどまっている。

東北地方で捕獲作戦を二回実施し、六匹を捕獲したこともあったが、六年にはニホンリスが狩猟獣から除外されたため捕獲ができなくなり、今いるリスたちを繁殖させていくしかなくなった。会員が繁殖方法などを学んだ井の頭自然文化園からつがいを二組贈られたりしているが、放し飼いにするだけの数にはなかなか達することができない。

それでも、会員はめげることなく、あくまで日本固有種のニホンリスに

こだわり、生態を研究しながらの、民間の手による繁殖が続いている。

リスと触れ合える公園、ニホンリスの里は、リスの数を増やし、放し飼いにするだけでは実現できない。市民の理解と支援が不可欠である。会では、野生動物や自然への関心を持ってもらい、環境問題を考えるため、講演会やリス舎の見学会などを通じての啓発活動も行っている。

自然と親しむ子供の育成のため、県の農林部との共催で森林教室（親子どぐり探検隊）を開催したり、餌の確保のため、ヒマワリの種を無料配布したり、クルミの木の植樹や下草刈りもしている。

地道な取り組みは着実に市民の間に浸透し、活動の輪は、大人から子供まで確実に広がってきた。

近所の保育園では「リスさんにプレゼントしよう！」と毎年ヒマワリを栽培しており、不作だった年には、保護者らがカボチャの種やクルミ、ドングリなどを拾って持ち寄った。軽費老人ホームの入所者の方々から二百^{キログラム}ものヒマワリの種を贈られたこともある。日ごろから気にか

けて、カボチャの種やクルミなどの餌を届けてくれる人も増えてきた。

九年には、県が地域活性化につながる県民の主体的な活動として募集した「とつとり」の誇り百選に選定されるとともに、その中からとくに優れた活動を県が二年間にわたり支援するモデル事業の五件にも選ばれ、新たに繁殖棟を二棟建築することができ、活動に弾みがついた。

オープンケージ舎が完成

市民を巻き込んだ会の情熱は、ついに市も動かした。市内の興和紡績倉吉工場跡地に整備された多目的交流ゾーン「倉吉パークスクエア」内に、金網越しではなく、だれもが直接リスと触れ合うことができる、オープンケージのリス舎が整備された。

リス園は今年四月にオープン、打吹公園のリス舎からニホンリス十五匹が引越した。円形のケージ内では、大人から子供までが、リスたちが走り回る姿に歓声を上げ、給餌台で餌を食べる姿にじっと目を凝らす、そんな光景が日常的なものになりつつある。

だが、課題も多い。ケージ内にはまだまだ木陰が少なく、直射日光が当たってしまったっているのだ。ニホンリスは、本来は樹上生活者であり、外的から身を守るため薄暗い環境を好む。そこで、急きよ会員の負担で植栽を実施するとともに、金網にすだれを掛けたり、果箱に日よけを作ったりと、対策に忙しい。植栽が十分に繁茂するまでは、リスたちの居心地を少しでも良くすべく、松尾会長をはじめとする会員たちの工夫は続く。

また、引越す前の打吹公園のリス舎では、金網越しに人の手から餌を食べることもあったリスたちが、人を怖がるようになってしまった。オープンケージという慣れない環境のせいばかりではない。開園当初、入園者から追いかけてまわされたのも一因である。かわいさあまつてのことではあるものの、「子供たちには少々目をつむるにしても、大人の方にはもう少し考えてもらえれば……」と理事の福田さんも苦笑する。やむなく、ケージ内の一部にロープを張ったこともあり、リスたちも今ではかなりケージ内を走り回るようには

なってはきたが、それでも人の手から直に餌をもらうようになるにはまだ道は遠い。繁殖を繰り返しながら、徐々に慣れさせていくほかない。

人とリスが直に触れ合えるリス園の整備で、夢の実現に向けて大きな



オープンケージのリス舎の給餌台

一步を踏み出した「倉吉ニホンリスの会」。日本一のニホンリスの里実現に向けて、その活動にはますます熱が入る。

（財）地域活性化センター 研修交流課
副参事 嘉村隆浩

倉吉ニホンリスの会
プロフィール

●設立年 平成四年三月 ●設立主体 自主的組織 ●運営主体 自主的組織
●代表者 松尾龍平 ●会員数 約百人
●事務局連絡先 〒六八二一〇八二四 鳥取県倉吉市仲之町八三一 倉吉まちづくり協議会内 ☎〇八五八一二二三四七七

自分たちも楽しみ 地域 Mini Day Service 介護 住み慣れたまちで 支え合う 関係づくりへ

かつて鹿児島、水戸とともにタバコの名産地として栄え、また表丹沢に代表される豊かな自然を擁する名水の里でもある神奈川県秦野市。小田急線秦野駅からバスで約二十分、住宅街の一角に、介護サービスを手がける女性グループ「野の花サービス」が運営するミニデイサービス「げんき・野の花」がある。ミニデイサービスを実際に体験しながら、同グループ代表の岩田桂子さんと、後述する「野の花ネットワーク」の事務局で、「野の花サービス」設立当初の経緯をよく知る渋谷路世さんにお話をうかがうことにした。

連である利用者たちはもちろん、ボランティアの男性もすぐに打ち解け、みんなが言いたいことを言い、絶えず冗談が飛び交い、笑い声が絶えない。昼食の後、スタッフの指導で合唱とハンドベルの合奏を行う。初めは「恥ずかしいから」としり込みしていた高齢者たちも、スタッフに巧みにのせられ、自分から歌いたい歌を提案するなど、すっかり熱が入る。利用者たちはもちろん、スタッフやボランティアの顔も輝き、気がつくとうち自身顔もほころんでいく。介護サービスにあり



野の花サービスのスタッフと利用者(後列右から3番目が岩田さん)

がちな義務的な感じ、よそよそしい感じが全くないことに驚かされる。

99年、市の指定業者に

現在は任意団体の形態をとる「野の花サービス」は、一九八四年から公民館で女性・教育・福祉・環境などの講座を企画から運営まで実施していた女性グループが中心となり、九四年十月に設立。公民館での事業運営で経験と自信を深めたメンバーたちの間で、「この経験を生かして何かできないか」という機運が高まり、何をやるかという話し合いの中で、「住み慣れた地域で暮らし続けたい。そのためにこのまちで支え合う関係をつくりたい」(渋谷さん)という理念が固まり、ホームヘルプ(訪問介護)に乗り出すことになった。ホームヘルプは介護に限らず子育て支援など利用者のニーズに応じてフレキシブルに対応した。当初は、一時間八百円の価格設定をしたが採算が取れず、事務局員・コーディネーター職はボランティアで行っていた。その後、利用者数の増加と、楽しめる外出先の必要性・人と人が触れ合う場所の確保な



●野の花ネットワーク

<http://www.j-volunteer.com/03/nonohana.htm>

を目的に、九九年六月にミニデイサービス「げんき・野の花」を立ち上げた。二〇〇〇年四月の介護保険制度の導入に当たっては、九九年十月にNPO法人「野の花ネットワーク」を分離独立させ、秦野市の指定事業者となり、トータル的な介護サービスの提供を目指すようになった。

「野の花サービス」の現在の体制は岩田さんと会計を担当する男性の常勤二人、非常勤二人の四人のスタッフを中心に、「ヘルパー会員」約六十人で構成され、訪問した日のように随時ボランティアも参加している。ホームヘルプを利用するためには「利用会員」として登録料一万円を支払う。利用は一時間の基本料金が千円となっており、現在約八十人

が利用登録をしている。ミニデイサービスは、現在のところ毎週一回木曜日を中心に、利用者の希望に応じて他の曜日でも実施している。基本料金は二時間二千円（昼食込み）で、スペース的な制約などから定員四人で運営しており、常連の利用者が十人いる。また、月一回の「カラオケ倶楽部」、二回の「麻雀倶楽部」など趣味分野のサービスも提供している。

常に利用者のニーズを優先

「野の花サービス」の事業運営において常に心掛けていることは、あくまでも利用者のニーズを優先させたサービス提供であるという。そのため、ホームヘルプにおいてもデイサービスにおいても、利用者の環境・

要望に応じてサービスの日時、回数、内容ができる限りフレキシブルに変化させるようにしている。また、女性の家事経験や育児・介護体験を介護サービスにおける女性の「キャリア」と捉え、そのキャリアを生かせる「職場」としてこの事業を展開しているとのこと。地域コミュニティの活性化にとっては、主婦を中心とした女性や高齢者など地域に眠る人材をいかに活用していくかが重要な課題である。ここでは規模は必ずしも大きくはないが、そのような環境が実現されている。

とはいえ、ここまでの道のりは決して平坦なものではなく、とくに活動拠点の確保には大変な苦労が伴った。「げんき・野の花」は往々にして周辺の住民から迷惑施設と受けとめられ、「地価が下がる」といった苦情もあった。利用者を車いすに乗せ、公園を散歩すると感情的な反発を受けた。そのような状況もあり、九九年と二〇〇一年六月の二回にわたり拠点を移している。ただし介護保険制度の導入後は、これに関する報道の成果もあってか、周りの人びとの意識も変わってきており、そのような感情的な反発を受けることも減ってきているとのことであった。

旭川など 全国のNPOと連携へ

今後の展望としては、まず、ミニデイサービスを週三回の常設にまで稼働率を上げることが目標である。また、現在北海道旭川にある旅のサポートNPO「旅とびあ北海道」と業務提携の交渉を進めている（訪問した日も「野の花ネットワーク」理事長がその件で北海道出張していた）。東京と北海道で、それぞれのNPOが利用者をサポートすることにより、東京から、あるいは北海道からの利用者が安全に、しかも安価に旅行できる連携体制がつけられないか試行錯誤中だという。

このような試みをきっかけとして全国各地のNPOとの有機的なネットワークが少しでも広がることが期待される。

今後の介護システムの重要な担い手となる地域介護の仕組みづくりにおいては、決して規模は大きくないが、自分たちも楽しみつつ、着実に歩みを進めていくこのようなグループが、どれだけ多くの地域に根付いているかが、実はカギを握っているのではないかと思われた。

（財）地域活性化センター業務第一課
副参事 飯田真一

焼きそばでまちがブレーク



渡辺孝秀

静岡県富士宮市企画財政部
企画調整課主幹兼政策推進係長

富士山の西南麓に位置する広大なまち、富士宮市に今、異変が起きている。この地域独特の「富士宮やきそば」で大ブレイクしているのである。マスコミ報道も手伝って、多くの観光客が街中の焼きそば店に押し寄せている。

休日には駐車場に、「なにわ」「名古屋」「千葉」「湘南」など多くの県外ナンバーの車が並び、焼きそば店はパニック状態。一時は、焼きそばを置いてあるスーパーや小売店から麺が一切なくなってしまうという異常事態まで発生した。

この「富士宮やきそば」なぜ今、熱くなっているのだろうか。そもそもは二年ほど前にさかのぼる。中心市街地の活性化をテーマとして市と商工会議所が開催した「市民ワークシヨップ」が発端となっている。中心市街地にどのように客を呼び込むか、集まった参加者六十人が模索する中、富士宮独特の焼きそばに着目するようになった。

これまで、日常的に食べ、あまり

にも身近すぎた素材であったことから情報発信などしてこなかったが、研究しているうち、いくつかのオリジナルティを再認識し始めたのが大きなきっかけとなった。

そのオリジナルティであるが、まず最大の特徴は、麺である。

シコシコとした歯ごたえのある硬い蒸し麺で、食感が非常に良い。二つ目は、豚の背油からラードを搾り取った後の肉かすを使用し、うま味を出していることである。三つ

目は、焼き上がった焼きそばの上に、イワシの削り粉を振り掛けることで風味が一段と増し、さらに、仕上げに紅シヨウガを添えて彩りをよくしていることである。

この地域独特のオリジナルティ、

しかもこの地域でしか食べることができない。加えて市民の生活にしっかりと定着しているのである。ここに目をつけ、ワークシヨップの卒業生が「富士宮やきそば学会」を結成。彼らは、自らを「やきそばG」

コミ受けし、テレビ、ラジオ、雑誌などであつという間に大きく紹介されるまでになった。この事業、何とんでも大きな特徴は、行政コストがゼロであり、絶大な効果が生まれた点だろう。



と名乗り、手弁当で多数店を一店一店調査し、店の特徴や休日などを掲載したマップを作成した。

名前のユニークさと、人口比では県内随一という焼きそば店の数多さ、オリジナルティなどによりマス

今、市民主導により「焼きそばのまち」として、その地位を着実に築いている。そして、その先には、焼きそばというまちおこしの起爆剤によって、元気のある中心市街地が復活することが予感できる。

誇りのもつる古里へ「やっちみろかい」

二〇〇〇年一月、宮崎県日南市の西端の中山間地域に位置する酒谷地区に残る、明治時代中期の石橋「大谷橋」が宮崎県による補修工事を終え、すっかりお色直しをしてお目見えした。

この大谷橋は、一八八九年に架設された半だ円形のアーチ状の石橋で、長さが二十二メートル、幅が三・四メートル。以前は旧国道の一部として交通量が多かったが、一九七一年の新国道開通とともに交通量が減り、放置状態となっていた。雑草や土で覆

われ、地元の人たちでさえ、その存在を忘れてしまっていた。

今回紹介する地域づくり団体「やっちみろかい酒谷」は、一九九八年、この荒れ果てた「知られざる名所」をよみがえらせようと保存活動を始めた。まずは、橋の清掃に取り組んだが、これが大変だったようだ。会員は、「平日の仕事の後や週末に清掃作業を行ったが、橋なので届かない。クレーン車を借りてきてぶら下がって掃除した。今考えると怖い気がするが、橋を復活させることに熱くなっていた」と当時を振り返る。

「自分のために、子供や孫のために、そして地域のために」知恵を出し合い、地域資源を生かした活動をモットーとする彼らは、その翌年から、きれいに近きり脚光を浴び始めた大谷橋を近くに「小布瀬の滝」とともにライトアップし、新たな観光名所としてよみがえらせた。

そして、今年の五月十二日に

ライトアップされた大谷橋の前でのオカリナコンサート



子供たちとアイガモ農法でもち米づくり



河野健一

宮崎県日南市企画調整課企画調整係主事

「やっちみろかい酒谷」の活動の大きな特徴は、地域住民、とくに子供たちとともに、「いつまでも住みたい地域 心に残るふるさと」づくりに取り組んでいる点である。日高茂信会長は、約十年前、「このままでは酒谷がつぶれる!」という危機感を覚えた。「自分が小学生のときは学校全体で約六百人いたのに、百人を割ってしまった。酒谷を愛する人を絶やさないよう、誇りの持てるむらにしなければ」という熱い思いで、一九九四年二月二十二日に会を発足させ、活動を開始した。ほかの会員は、「以前は出身地を言うのが恥ずかしかった。今は胸を張って『酒谷』と言っている」と話す。

会の名称「やっちみろかい」とは、方言で「何事にも挑戦する。やってみよう」という意味。その名とおり、自由な発想と失敗を恐れないチャレンジ精神により、多種多様な地域資源という古き良きものに息吹を与え、元気なまちづくりが脈々と進んでいる。



募 集 平成13年度 防災 まちづくり大賞

●「防災まちづくり大賞」とは
地域の防災力の向上を図るためには、ハード、ソフトの両面から防災に配慮したまちづくりをすすめることが大切です。このため、地方公共団体や地域のコミュニティ、事業者などが行っている防災に関するさまざまな取り組みのうち、とくに優れたものを表彰する「防災まちづくり大賞」を実施します。

●応募方法
都道府県の推薦による応募のほか、(財)消防科学総合センターホームページ (<http://www.isad.or.jp/>) などを活用した自薦による応募方法があります。

<防災まちづくり大賞の概要>

●実施主体

主催＝総務省消防庁、(財)消防科学総合センター／後援＝日本放送協会、(社)日本民間放送連盟、(社)日本新聞協会

●表彰の対象

都道府県、市町村（一部事務組合を含む）、消防団、自主防災組織、婦人防火クラブ、少年・幼年消防クラブ、事業所、ボランティア団体、NPO、大学などの教育機関、まちづくり協議会などの各種団体・組織の取り組み。なお、防災以外に福祉など、複合的な活動についても、表彰の対象としています。

●表彰の種類および表彰事例数

総務大臣賞（2事例程度）／消防庁長官賞（3事例程度）／消防科学総合センター理事長賞（5事例程度）
※副賞として、総額50万円程度の賞品（パソコン、デジカメなど）を予定。

●締め切り 平成13年9月28日（金）必着



防災まちづくり大賞マークと和紙

●応募先および問い合わせ先
(財)消防科学総合センター
研究開発部調査研究課 小松
〒181-0005 三鷹市中原3-14-1
☎ 0422-49-1113 ☎ 0422-46-9940
e-mail komatu@isad.or.jp

お知らせ 地域産品・観光おこし研修会

主催＝(財)地域活性化センター、(社)日本観光協会

●日程・会場

北海道会場＝平成13年10月4日～5日札幌市／札幌プリンスホテル
九州会場＝平成13年11月8日～9日福岡市／ソラリア西鉄ホテル

●研修内容

新しい観光の流れについての講演および事例地の資源や特性を生かした土産・観光振興の方法についてのグループ演習など。

講演＝21世紀型の新しい観光の潮流はこれだ！

講師＝小林英俊氏（(財)日本交通公社観光マーケティング部長）
グループ演習＝地域特産品が観光を変える

講師＝須川一幸氏（(株)地域振興研究所代表取締役）

●申込期限

北海道会場：平成13年9月7日
九州会場：平成13年10月12日

●参加費用

7,000円（研修費、昼食代、交流会費）

●お問い合わせ先

(財)地域活性化センター業務第2課
担当：畑尻・大野 ☎ 03-5202-6137



◆中国、比など センターを訪問

国際協力事業団（JICA）が、開発途上国への技術協力の一環として行っている研修が五月相次いで行われた。一つは二十二日の中小企業政策セミナーでテーマは「国・自

治体による地場産業・地場企業の振興について」であり、九カ国（中国、インドネシア、フィリピン、ミャンマー、バキスタン、スリランカ、マレーシア、タイ、ペルー）の国家公務員・地方公務員九人が参加。また、青年招へい事業に関し、二十九日に中国から国家公務員・地方公務員二十五人が公務員行政をテーマに、六月十二日にフィリピンから国家公務員・地方公務員および金融機関の職員十九人が地域振興でセンターを訪れた。

最初に業務説明を行い、そ

◆10月京都で 地域活性化フォーラム

(財)地域活性化センターと京都市は、十月三十日にホテルグランヴィア京都を会場に「地域活性化フォーラム in 京都」を開催する。

「民間と自治体の協働によるまちづくり―地域活性化における民間と自治体の役割を考える―」と題して、堀場雅夫

の後、意見交換を行ったが、予定時間が足りないほど活発な質疑となった。なお、フィリピンからの来訪者は「ふるさと情報プラザ」の視察も行った。

◆監事に 井関英男氏選任

(財)地域活性化センターは、及川謙三氏の後任に八月一日付で井関英男氏を監事（非常勤）に選任した。

●首長来訪

▼岩手県水沢市 後藤農市長（7月26日）

笑顔がいちばん！ 放送予定

●9月2日

兵庫県神崎町、城崎町
歴史文化再発見

●9月16日

鳥根県湖陵町、石見町
おふくろの味ネットワーク

●9月23日

長崎県下五島地域
過酷！ トライアスロンの戦い

●9月30日

鹿児島県桜島町、三島村
桜島縦断 魅惑の海と島

TBS系、毎週日曜日
午前7時～午前7時30分

※一部で放送日時が異なる地域があります。

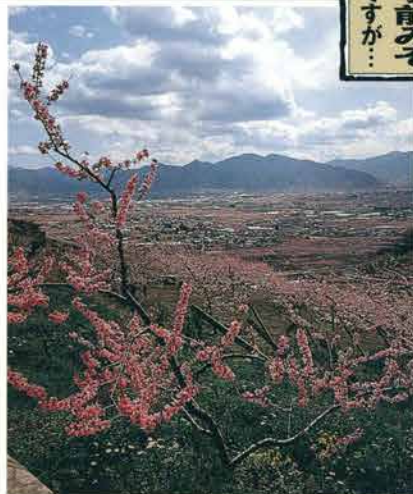


便りにしたい思い出が、できあがります。



石川県
ISHIKAWA

春日居町は甲府盆地のほぼ中央に位置し、遠く昔、奈良・平安時代には、甲斐の国の国府がおかれ、甲斐の政治・経済・文化の中心地として栄えていました。平安時代後期に、長谷寺(春日居町)と大善寺(勝沼町)の僧徒が修験問答のこじれから戦となり、長谷寺の僧徒は大善寺から笈(山伏の背負う箱)を、大善寺の僧徒は長谷寺に協力した山梨岡神社(春日居町)の鳥居を持ち帰り、それぞれ笈と鳥居を焼き払い、これが、春日居町の笈方焼、勝沼町の鳥居焼の始まりと言われています。笈方焼は、孟蘭盆の精霊送りの篝火として江戸時代末期まで行われており、山麓に残されたテラス状の「釜」と呼ばれる石積みの跡から、一辺400mで日本一の規模を持つ山焼きだったことがうかがわれます。1988年に復活した笈方焼は、今では、特産品の桃の花が辺りをピンクに染める4月の上旬に行われ、「春日居温泉郷桃の花まつり」の夜に幻想的な趣を添えてくれています。



笈方焼

そもそもは
山伏の戦から…



9月のイベント予定

★日本橋プラザビル
イベントスペース

9月6日～7日
大湯村（秋田県）

9月13日～14日
東村（福島県）

9月20日～21日
泉州特産品振興会（大阪府）

9月26日～28日
新発田市（新潟県）

★ふるさと情報プラザ
イベントスペース

9月3日～7日
岡山県

9月10日～14日
ながと路観光連絡協議会
（山口県）

9月17日～21日
富士川町（静岡県）

9月25日～27日
奥只見郷観光開発協議会
（新潟県）



7月実施イベント

★日本橋プラザビル
イベントスペース

7月5日
山口県
「山口きらら博」PRイベント①

7月6日
沼田市（群馬県）
平成13年度沼田市観光
キャンペーン②

7月9日～10日
静岡県
「夏はやっぱり冷茶が一番」
冷茶キャンペーン

7月24日～25日
女川町（宮城県）
おながわ豊漁まつり

★ふるさと情報プラザ
イベントスペース

7月2日～6日
神戸市（兵庫県）
神戸21世紀・
復興記念事業のご案内

7月9日～13日
岩手県市町村東京事務所
連絡協議会（岩手県）
魅知の国「いわての
観光と物産展」③

7月23日～26日
山口県
きららPR展

編集後記

▼庄内空港に立ち寄った際、一角に明るい色彩の織が展示されていた。ひところ出回ったことのあるホームスパンの感触を思い出した。パンフレットをみると、障害のある方が織ったものであり、手織りを通して自立と社会参加を目指している、と書かれてあった。それが、今回特集で紹介している糸織業である。偶然の出会いにも楽しいものである。

▼久米島軸については、高齢化がスピードを上げている中、高齢の方が生きがいを持ちながら自立しているという話である。仕事を、趣味に楽しんでいる様子が目に浮かぶ。

▼今後、日本はモノづくりを礎に、世界に通じるソフトの開発も急務。デザイン力の強化という点で、高校生をはじめ学生を対象にした青森、岐阜などの試みにより世界へ羽ばたいてほしい。

▼今立町のファッション素材は蚊帳地を含め十数種類以上揃っているという。歴史ある機織り産地の裾野の広さだ。蚊帳と聞いて、その中は親子、兄弟の絆を深める格好の場であったような気がふつとした。これに賛同してくれた人もいた。

（丘）

特集Ⅱ 動物・生物によるまちづくり

地域づくり9月号

平成13年9月1日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話 03-5202-6131（代） <http://www.chiiki-dokuri-hyakka.or.jp/>

印刷＝大日本印刷株式会社

どんな夢をねらおうか。



ジャンボにロトにインスタントくじに、うれしい夢いっぱいの宝くじです。



二科展デザイン部 入選作品
萩野 淳

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。

宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。



財団法人 **日本宝くじ協会**

当せんはしっかり購べて、しっかり換金。

宝くじのホームページ

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>

本誌は財団法人日本宝くじ協会の助成を受けて刊行しています。